風俗文選 巻之六 五老井 許六選

○箴類

飲食色欲ノ箴

許六

○善は常也。悪は變なり。悪出て後善あらはる。善悪に迷はぬ人は。其善悪になづまぬ人なり。食は禮より重く。色は民と共にせよとかや。されど食の命をやしなひ。色のあはれをしれる功も。なづむ心より。やがて大病を生ぜり。色は二教ともににくむ事甚しきゆへに。甚制せられず。和朝歌道のおしへの高き事は。戀を第一とす。色は風雅也。風雅は仁なり。惻隠の心あり。大舜の二女に嫁し給へるも。今日おして見る時は。是畜生なり。かのながれを汲やからは。これらをもよしとなづめり。元来畜生兄弟姉妹と嫁する事をせずは。人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはむか。彼教には。後なきを不孝の第一とたてて。孝を五倫の始にをけり。若周公。孔子。天性精の虚したる人ならば。子なけむ。第一の孝道は欠ぬべし。是とても聖人のまつたきといふべきか。桀紂が極悪も。子あれば是孝子なり。子なき君子にはまし侍らんか。

「吾朝。いづれの御時よりか。西域の教を廣めり。此教は。後なきを第一とせり。其ながれをたつる者世に多し。大路を行人も。十が三四はこれ也。神の道に合して。これを兩部といへり。扶桑東夷の機をよくしり。かつ小國の分量をよくさとせり。地のせまく。人の過たる國也。彼やからの人々。後なきを不孝とし。鼠の子を産捨侍らば。程なく富士山もこぼち入られ。湖も彌。鹿飛を切ぬく沙汰に及ばむ。堂塔に金銀をちりばめ。法事法席に美を盡すといふとも。其費は國にとゞまりて。他の所へはもれず。多の眷属の食ひつぶし侍らんよりは。いとめでたし。佛供といへる物は。備へたるばかりにて。嘗てへらず。是日の本建立の源ならむか。こゝをきれ。かしこをたて。子孫あらせじと思ふなりとの給ひて。一人の罪人となり給ふ。御心こそありがたけれ。しかはあれ共。此頃は。僧のかくし子といへるものあれば。少はもどるか。

「温飩は汁をほめられ。蕎麥切は。からみに威をとられり。奈良茶は。跡一盃を茶につけらるれども。其號を持り。飲食器物共に。すぐれたる極品の物は。賓客のもてなしとせるに。たばこばかり

は。亭主を奔走せり。客人たばこは。へらぬを調法とせるは。何ぞや。

「餅は心地よき物。酒はうれしき物。茶は淋しき物。もちくひは酒をのまず。酒好は饅頭をくはず。是天の自然か。たま〳〵上戸に。嫌なき生れつきあるは。牙あるもの丶角をいたゞきたる類とやいはむ。

「傾城の色は。晋子が見届て。いひふるしたれども。遊君の情は。下品にこそおかしき事はあれとて。木導は。出女の上を盡せり。よき遊女のきぬ〳〵のうつり香は。こぬか袋の匂ひかともおもはる。やす傾城の匂ひは。郡内縞のうつり香ならん。追込辻君のたぐひは。にほひ曾て定まらず。

「隠居の妾ほど。うらやましからぬものはあらじ。さだまれる名をさへいはれず。若きをも。祖母〳〵とよばれつるこそうたてけれ。色欲におぼれて。あくまで淫ずるものは。男女に上下のたがひありて。高家富貴の人の妻は。七人半のあてがいといへるも。男子の德とおぼえり。たとひ七人が十人といはれたり共。いやとはいふまじきに。半とかぎりたる。はしたの妻こそおぼつかなけれ。

「雪駄の男。鼻紙の知音とさだめて。いくたりの妻を重ね侍るは。下女やはしたの上の奢なりけり。筑摩の祭のあとたえて。おこなはれざるは。かれらが爲には。おほきなる仕合ならん。かゝる淫樂の世となり行も。神道のおとろへたる。神のとがめとやいふべき。

「鮟鱇。河豕魚といふ魚あり。形も大きにうまれつきて。あくまで肉をくはれながら。汁を吸るゝを。手柄にいはれけるこそ。大きなる損なれ。

「鯛は魚の最上とほめられながら。鼻屎にて釣られける。ためしもありや。いと口おし。

「鰯といふものは。魚類の下品にいひなされて。いやしきもの丶そへ物となるのみならず。田畠の肥しとなるこそ。猶口をしけれ。しかれども。正月のとぶきに引出されて。上臈のまじはりをするを。自慢顔なり。されどもかしらばかりをはやされ。獄門のごとくになりて。口〳〵(門〳〵カ)にさゝれ。果は簾の先にかゝりて。行方しらず成行けるも。猶〳〵口をし。

「かながしらといふ魚は。あたまがちのみにて。くふべき所すくなし。彼かしらのかたき所に手柄ありて。産屋のとぶきには。かしづかれて出る。惟然坊が。つぶりのやはらかなるは。かれにも似よかし。

「魚鳥の匂ひをもてなさるゝは。むしり

喰れながらも。本意とやはおもふらん。

「鶴は。芹の香の俤を残し。雉子は。昔なつかしき匂ひをとゞめり。痩て小兵とはいへども。雲雀のいきりもの。水無月の鶴鴈とほこりける。

「生海鼠といふものゝ匂ひは。たとふべき物なし。牛房の香にかよひておかし。松茸のふん／＼たる物に。毎度柚の相客に出らるゝ類ひ。

「焼蛤の馨しきには。胡椒の粉の鼻に入たるがうれし。かばやきの匂ひ。風流にはあらねど。うまき匂ひとやいはむ。

「ある法師の。茄子の鴫やきをほめられければ。傍の俗人。鴫の茄子やきも又よしと返しける。

「時を感ずるといへるは。かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに。つまみ菜に。唐がらしの青くさきは。初秋のあはれをすゝめり。

「芹蕗のたうを。春の景物に撰置は無念なり。定家の卿。冬の花に梅をよみ給ふいとよし。

「鰤は。節振舞をかぎりとし。鯖は生身玉を終にとれり。

「さんちやは四つ時。出女は八つを威勢の盛といふべし。吾翁。色と義の道をしめし給へる詞に云。

　色をおもふ事は。うどんを見るがごとく。義を守るものは。唐がらしの辛に類せよと。

「山葵。生姜。蓼。からし。山椒の辛き類も。各其場所を得たり。海鼠腸といへる物には。わさびの打あがりたるからみをすり込。昆布に巻込るゝ時は。山椒の手柄を見せたり。鯉のにつけの清けに。飯鮹のおぼつかなき味をもてる。

「色はおもひのまゝならぬ命とはよめり。あはぬをかこち。逢夜の鳥をうらみ。待宵の鐘に。戀の情を盡せり。湯殿柴部屋のせは／＼しきちぎりに。百とせのよはひを。のべたる心地して。さらぬ顔をつくりて出たるもをかし。せはしき事を。戀のあはれといふとも。八坂北野の茶屋ものゝ振廻ほど。手廻しなるはなし。燭臺を握り。階子に上り。客を迎ふるより進退に左右の手を空しくせず。内の亭主心得て。二階口へ銚子盃さし出し。取肴あまたならべり。二三献の過るを待かね。屏風引廻したるは。つまみくらひたる。蛸や酢貝の。胸につかへたる心地やせむ。

「玉子。山ノ芋は。腎の薬とばかりおぼえて。同じくい物ならば。水をます物にしくはなしとて。朝夕すゝめり。虚實ともに病となりて。尅する所をしらず。古人も。口よく病を致し。其徳を敗る。口を守る事は瓶のごとくせよとはいへり。吾

生はかぎりあり。情欲はかぎりなし。色好むものは。みだりに淫せず。傾城に家を亡すものはあれど。胥虚をしたる人をきかず。

聴ノ識

許六

○耳はきく事の役者にして。聖人耳に惡聲をきかずといふは。大きなる無理也。たとひ山林深谷にかくれたり共。惡聲を聞まじとはいひがたかるべし。されば釣鐘も通ぜぬかな聾をよしとはせず。瘂は元來母の胎内より聾にして。此世の音聲をきかずとかや。元來舌の短きにはあらず。其かたちを見ず。其聲を聞て埒するものは。神鳴。ほとゝぎすのたぐひなるべし。尤鳴神は。雲中の沙汰なればさもあらんか。昔より此鳥。此聲をなくと。慥に引合てきく人なし。當世は鳩鴨のたぐひ。此聲を鳴もしらず。たゞ本尊かけたとなけば。是非共此鳥にするもおぼつかなし。和漢詩歌の相違あり。千聲万聲。たゞ鳴〳〵とばかり。詩には作れり。此國の歌には。なかぬ事をかこちて。きかぬうらみをよめり。つまる所はひとつなり。和國風流の手柄にして。此鳥にかぎらず。此たぐひ多し。琴をきむとよむは。禁の字の心なるべし。此音を聞時は。邪念を禁ずる事也。もろこしの人は。常住これを左右にし。旅行にも携へ。瀧を詠むるにももたせたり。すべて一日の中。見る事は一にして。きく事は九つなるべし。須臾の間も。耳中に物の音聲の。客とならざる間なし。されば見る警よりも。聞警はさきなるべし。其かたち見たらんより。其聲をきくに。情をますたぐひこそおほけれ。むかしより見ぬ戀にあこがれ。思ひをちゞにくだき。傾城の箱階子あらゝかに蹈ならす音は。見るよりも其音に胸つぶるゝわざなれ。蕎麥切はおろしの音に心ときめき。樂屋の笛のしらべは。其猿樂のめでたく舞かなづるよりも。ゆかしきわざなれ。隣家に餅つく音。極熱の頃。垣を隔てゝ車井のはしる音は。其亭主の心まで。涼しく思はれ侍る。和朝もてはやす。小歌。淨瑠璃。箜篌。三味線。是皆婬樂とて。君子はいやしまれける。此音曲をきく時は。何のあて事もなくて。不圖戀慕のおもひを催す。鉦鐃鉢の音は。我人心よからぬ聲と。おぼえたるこそことはりなれ。此音聲は。無常を催す事を。第一につくれり。むかし聖人。樂を以て天下を治め給ふ。我朝の樂も又同じ。夫樂は。天地を動かし。神鬼をなかしむるもの也。これを聞人感をなさずといふ事なし。是其民の邪を禁ずるの源也。されば畔を讓

り。戸ざしをわするゝもことはりならん。婬楽暗に戀の思ひをなし。鐃。（鉦カ）鐃鉢。自然に死の近づく事を悲しぶ。是人心の私なきしるし也。何ぞ聖人楽を以て。國を治るに治らざらんや。王昭。西施が美なるをきけど。人終にほれたるためしなし。これ共王昭西施に念を動かさゞるしるし也。吾情たゞしき時は。其物にあつからず。聖人耳に悪聲をきかずといましめ。禮にあらざればきく事なかれといふも。此あたりのいましめなるべし。

机銘　芭蕉　　東銘　支考
西銘　許六　　茶碗銘　嵐雪
雲竿園銘　汶村　　飯匙銘　呑舟
座右銘　芭蕉　　是非齋銘　許六

〇銘類

五老井　許六選

机ノ銘

芭蕉

〇間なる時は臂をかけて。嗒焉吹嘘の氣をやしなふ。しづかなる時は書を紐とひて。聖意賢才の精神をさぐり。靜なる時は筆をとりて。羲素の方寸に入。たくみなすおしまづき。一物三用をたすく。高さ八寸。面二尺。兩脚におめつちのふたつの卦を彫にして。潜龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせむや。

東ノ銘

支考

雙白堂主野紅子。夫妻相共好風雅。因有双白之號。東銘指野紅。西銘日其妻。

〇むかし人の繪を書そめしに。丹青は後の事なりとて。此白の一字をぞたふとま

れける。身に錦繍をまとひ。頭に金冠をいたゞきて。君といひ。臣といひ。男といひ。女といふ。さるは人の見て名づけたる名なるべし。しかるに女のをみなへしは。嵯峨野の露のよすがもあるに。男のをみなへしは。いづこの野邊の秋にかあらん。たゞ此双白堂のあるじとならば。かの商山の翁に頭ならべて。花もおもしろからん。月も面白からむ。其銘にいはく。

〽花鳥にさとればもとのしら髪かな

西ノ銘　　許六

○つよからずつよからぬ女の風雅は。糸筋のごとく。此糸五色に汚れざれば。狂客の悲しみをそへても。何がしが緇塵にそまらざるよろこびを見せたり。天の香來山の衣をたち。布引の機物をはえたる糸すじも。皆是ほそみより出たる。女の手わざならん。猶日本紀の局が。初音の巻にいひけむ。瀧のよどみの年なみより。水上としつもりて。老にけらしな。黒き筋なしとは。共に双白堂の事なるべし。其銘にいはく。

〽髪の花女瀧男瀧のかざしかな

茶碗ノ銘　　嵐雪

○黒茶碗あり。花の朝は。ます〳〵黒く。雪の夕は。いよ〳〵黒し。月待宵のやみをさぐり。闇夜に鼻をとられしは。ゐの〳〵つちめくらのまじはりなるべし。

撿挍　貧僧　大黒　小ぐろ
はちの子　早ふね　小雲雀

三代目をのん子といふ。のむここそ猶ふかき意味あれ祕してしばらく殘す。

〽まつむしのりんともいはず黒茶碗

雲華園ノ銘　　汶村

五老井四絶ノ一章也

○夫茶は龍鳳を貴とするは。歸田録の詞也。和漢飲食の中の重味也。陸羽が茶經にのする所。建州。洪州に名茶多して。杜牧もこれをほめたり。和朝明惠といふ聖。唐巴東の實をとりて。始て越前の國に植。都の北。栂の尾に移せり。猶茶の土地に佳ならずとて。終に宇治山に掘うつして。上林何某が家をかゞやかす。近世の土産は。駿州の安部。みの〻莖長。熊野。近江。其中に江東の茶勝れたり。政所。松ノ尾は極品也。しがらき。宇治田原は。又其次也。檗山禪師來朝して。唐茶の鍋煎を製す。世もつて隱元茶と號す。これは是出し茶也。それより首の長き茶鑵を作つて。給仕の小坊主をたすけ。几下牀頭

にすへて。手づからくむ。其銘に云。

能さゝす　能まじはる
よく悟る　よく寂す
能すゝむ　能へらす

六の徳を兼るといふ共。茶ありて水な　。水あつて茶なくば益なし。龍焙。金砂の二泉は。茶を烹るによろし。三の間の水。柳の水ありといへども。許子が五老井を汲で。此茶を烹る時は。白雲満碗花徘徊す。一たびこれをすゝる人は。専風雅の志をすゝむ。盧仝が七椀といふは長過たり。

飯酢銘　　吾仲

○飯鮓は。いづれの時よりかもてはやしけむ。此六條の銘物にはいへりけり。今はおほやけの奉りものにかぞふれば。下ざまの人は。日を限りても待べし。ましてや卯の花の咲ころは。此ものゝけしきも清からんに。藤の花の咲時に。それが節をあはせたらん。いかなる人の深き心か侍りけむ。是にて二季草の名も。世の人はいふべし。器物は。杉の香もてつけたる折に入て。此花をかざしにも。又は文など付てもやるべし。かくこと〲しきやうなれど。すべて上ざまのもてあそびもの也。長良の鮓は。むかしをしのぶより。梅津かつらの名にしられて。大津松本の旅人も。笠をかたぶけずといふ事なし。かの茄子たけの子の鮓といへば。何のこけらにも似かよひて。あま法師のこがれものならんに。是は形のもてはなれたれば。人の得しらぬも尤なるべし。是に黄な粉といふものを。など添ては給はらぬぞと。ある人のいひたるを。飯ずし見るたびの。笑ひ草にはいふなるべし。其銘にいはく。

以飯名鮓　鮓而非飯
一點鱠皮　十重鳥子
色於雪白　香非梅酸
藤花漸暗　橘香已近
貴介尤褒　下萬未知
昔卞和玉　似之是照

座右銘　　芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云

ものいへばくちびるさむし
あきのかぜ

是非齋銘　　許六

○是を是とするは。諂へるにちかし。非を非とするは。謗るに近し。羽官平日。儒釋道の書をよむ。道は儒の敵となり。儒は佛のむかふ座主にとれり。若酢吸の三翁。世に再生して。吾

はいかいの道を塩梅せば。きはめて是非斎の遊を覗ひて。箸箱の連衆に入らむと。あの方より望まむ。

嵐蘭誄　芭蕉　丈艸誄　去来
去来誄　許六

○誄類

五老井　許六選

嵐蘭ノ誄

芭蕉

○金革を褥にして。あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて。君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は。義を骨にして。實を腸にし。老荘を魂にかけて。風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事。十とせあまり九とせにや。此三とせばかり官を辭して。岩洞に先賢の跡をしたふといへども。老母を荷なひ。雛子をほだしとして。いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日々風雲に座して。今年仲の秋中の三日。由井金澤の波の枕に月をそふとて。鎌倉に杖を曳。其かへるさより。心地なやましうしゝ。終に息絶ぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先だち。七歳の稚子におもひを残す。五十年にだにたらず。公の爲には。腹をしきりても悔まじきうつはものゝ。はかなき秋風に。いまだおしむべき齢ひの。吹しほたれたる草の袂。いかに露けくも。口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに。老母の恨。はらからのなげき。したしきかぎりは聞傳へて。偏に親族の別にひとし。過つる睦月ばかりに。稚子が手をとりて。予か草庵に來たり。かれに號得さすべきよしを乞。王戎五歳の眼ざしうるはしと。戎の一字を摘で。嵐戎と名づく。其よろこべる色。今目のあたりをさらず。いける時むつまじからぬをだに。なくてぞ人はとしのばるゝ習。まして父のごとく。子のごとく。手の如く。足の如く。年頃いひな

れむかびたる佛の。愁の袂にむすぼゝれて。枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべむとすれば才つたなく。いはむとすれば胸ふたがりて。たゞおしまづきにかゝりて。夕の雲にむかふのみ。

〽秋風に折てかなしき桑の杖

丈艸誄

去來

○今歳二月末の四日。月は草庵に殘ろ物から。禪師身まかり給ひけりと。湖南の正秀が許よりしらされけるにぞ。胸ふさがり涙とゞめかねぬ。つく〴〵此人のむかしを思ふに。尾張の國に生れ。犬山に仕へて。勇猛の名もありしとかや。一日若黨一人を供し。ひそかに君父の前をしのび出。道の傍に髮おしきり。黑染には引かへられける。常の物語には。指の痛ありて。刀の柄握るべくもあらねば。かく法師にはなり侍ると也。ある人のいへるは。其弟に家祿讓り侍らんと。かねて人しれず志ありて。病にはいひよせられけるとなむ。其後洛の史邦にゆかり。五雨亭に假寐し。先師にま見え初られしより。二疊の蚊屋の内に。頭をおし並べ。四間の火燵の上に。面をさしむけて。吟會おほくは此人をかゝず。先師の言に。此僧此道にすゝみ學ばゝ。人の上にたゝむ事。月を越べからずとのたまへり。其下地のうるはしき事。うらやむべし。然れども。性くるしみ學ぶ事を好まず。感ありて吟じ。人ありて談じ。常は此事打わすれたるが如し。先師深川に歸り給ふ頃。此邊の句ども。書あつめまいらせけるうち。大原や蝶の出て舞ふおぼろ月などいへる句。二つ三つ書入侍りしに。風雅のやゝ上達せる事を評し。此僧なつかしといへとは。我方への傳へなり。又難波の病床。側に侍るもの共に。伽の發句をすゝめ。けふより我が死後の句なるべし。一字の相談を加ふべからずとの給ひければ。或は吹飯より鶴を招むと。折からの景物にかけてことぶきを述。あるはしかられて次の間に出ると。たよりなき思ひにしほれ。又は病人の餘りすゝるやと。むつましきかぎりを盡しける。其ふし〴〵も等閑に見やり。たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ。丈草出來たりとは。感じ給ひける。實にかゝる折には。かゝる誠こそうごかめ。興を探り。作を求るいとまあらじとは。其時にこそ思ひ知侍りけれ。先師遷化の後は。膳所松本の誰かれ。たふとみなづきて。義仲寺の上の山に。草庵をむすびければ。時々門自啓。曲々水相逢などゝ打吟じ。あるは杖を横たへ。落柿舎を扣て。飛込だままか都の子規とも驚かされ。予も彼山に

這のぼりて。脚下琶湖水。指頭花洛山と。眺望を共にし侍りしを。人は山を下らざるの誓ひあり。予は世にたゞよふの役ありて。久しく逢坂の關越る道もしらず。去〻年の神無月。一夜の閑をぬすみ。草庵にやどりて。さむき夜や。おもひつくれば山の上と申て。こよひの芳話に。よろづを忘れけりと。其喜びも斜ならず。更行まゝに雷鳴地にひゞき。吹風扉をはなちければ。虚室欲奪閑是寶。滿山雷雨震寒更と。興じ出られ。笑ひ明してわかれぬ。身の上を啼からす哉ときこえし。雪氣の空もふたゝび行めぐり。今むなしき名のみ殘りける。凡十年のわらひは。三年のうらみに化し。其恨は百年のかなしみを生ず。をしみても猶名殘をしく。此一句を手向て。來しかた行末を語り侍るのみ。

〽なき名きく春や三とせの生別れ

去來ガ誄　　許六

○維寶永元甲申のとし秋九月。落柿舍の去來卒す。嗚呼悲しひかな。此郎は。向井氏玄勝老人の末の子に生れて。筑紫の方におひたち。名は平次郎。武を業とし。若かりし時より洛に居す。弓矢を捨て十五年と吟じたるは。十五年先の事也。合せて三十年來の大隱士。和名これを浪人とはいふ也けり。いつの頃よりか。先師蕉翁に見えて。風雅の名高ぶり。京師にかまへて。諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ。東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱じて。あら野の時。正風体のまなこをひらきて。

〽湖の水まさりけり五月雨とかや。

猿蓑の選を蒙りて。不易流行の巷をわかち。後猿の新風にのぞみても。終に幽玄の細みをわすれず。

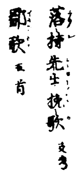
〽木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼や雲雀の十文字とは申けり。又いづれの仲秋にや。

〽岩ばなやこゝにもひとり月の客と吟じて。先師の耳を驚かし。月賞翫の第一。古今の秀逸にはきはまりたり。すべて一兩句もてる人さへ稀なるべし。此おのこは。已に數句に及べり。二十余年薪水の功積り。嵯峨の落柿舍に師を迎へ。石山の幻住庵に老を訪ふ。心ざし深くて。一とせ難波の變を聞て。遠にともづなを解。義仲寺の葬りにも。肩衣に鋤鍬を携ふ。死後の城を堅守り。諸生をなづけ。初心をたすく。越の浪化にかはりて。有礒砥波の書を選し。崎の卯七をたすけて。渡り鳥を集む。此秋我大願に力をよせて。文選序者の一人にすゝみ。病床に伏ても。三度自他の書を寄たる

に。いかなる蕉門滅亡の月日にやありけむ。去年の冬は。中越の院家薨じ給ひぬ。ことし衣更着。丈艸卒す。秋九月此郎去て。手もぎ足もぎの思ひをさせて。人の腸を斷せけるぞや。猶生き殘りたる十大弟子の中にも。世のたすけとなりがたきもあるべし。其人かの人と。かへまくほしと思ふ方も有べし。從來の因緣ふかきえにしありて。しかも同じ痢疾のやまひをうけて。共に終りをとれり。身は貧閑清寂の高みに遊びながら。老兄法印の孝養をわすれずして。常は心ならぬ。余所のいとなみもいそがしく。ある時は攝家親王の御館に候じ。遠近の來客に對し。四時の運氣を察し。二十六の陰晴を考ふ。されど花鳥の細みをわすれず。月雪のあはれに。情をなやます病ありて。起臥のさびしきをしらずとかや。猶おもふ人のなきにしもあらで。此事かの事仕果してむ。今宵は森の下露わけそぼちて。小萩がもとに袂しぼらんと。玉だれのひまもとむるに。あらぬさはりのみ出來がちにて。初夜過る雪駄の音も程なくしづまり。夜がれのみぞおほかる。又の日もつとめて。とくより例のいそぎに。心のどまるきはもなくて。そゞろ事に暮しつゝ。夕陽西にかたぶけり。こよひこそと。物くひ湯あみし。みじか羽織に長刀。足ばやにすべり出て。東がしらにむかふたるは。天晴私の黨の旗頭。熊谷笠の見いれもよしや。よしやあしやの取沙汰はせぞ。うき名は賀茂の早瀨にながせと。川風寒み千鳥さへ啼て。下庵ちかき聲づくろひ。仕はてざるにさつと明て。打入たるけはひ。しばしいふべき事さへなくて。灯火ほそき方に向ひ。盆引よせ。少くゆらせてより。心地づきたり。此ほど四五日のとだへに。珍しと見るなでしこの。もとゆひものびやかに。露けき心地せられて。あはれなる事ぐさに。節小袖の染もやうも。いまだ其夜はきはまり兼て。膝のはづれに打ふしたれば。小夜もやう／＼更て。衣手さむくそひ臥たり。明ばとくかへらむなど。契りかたらふひまもなくて。南禪寺の豆腐屋も曉をおかし。白川黑谷の鐘も。手枕のすき間をつとふに。うち驚かされて。帶引しめ。刀ぼつ込。氷まじりの朝川越て。小芋中ぬきの頃。京にはいきつきたり。今はの時の人しらぬ。心の中さへ思ひやりぬ。現の境も千々の思ひを碎き。娘の生さき。其子の母の行末。いかに覺束なく見果つらん。

ア、悲哉。松本山の僧が身まかりぬる時は。此秋我に誅せらるべしとは。よも思ひよるまじ。今我辭を作て彼を痛む。此次必我番にあたらむも。又哀なるべし。ア、悲哉や。



風俗文選 巻之七　五老井 許六選

○**歌類**

落柿先生挽歌

支考

此歌四章而後。加變聲之歌三章。漢無此法。蓋和文一體歟。

○ことしはいかなる年なれば。かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年の神無月は。浪化の君にわかれて。霜の光に名をしたひ。粟津の丈艸は。此きさらぎの願ひにみちて。花の陰に歸り給ひぬ。卯月のはじめは。落柿舎に日をくらし。其事彼事語り合て。是よりたれが身の上をや。鳥も啼らむと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入て。かくいふ我ばかり殘り居たらん。沖の船の友を失ひて。老の波のよるかたなき心地ぞせらる。なき人の此ごろおほき世やさらにと。むかしの人のなげかれしも。かくあぢきなきをりなるべし。人は廿ばかり。三十も過るまでは。をのれが友達も。同じ心のすこやかにおひたちて。たまたまなき人の上を見ても。あはれとはおもひけめ。おどろくほどの悲しさにはあらず。よそぢも過行ほどよりは。幾とせの交をかさねて。その人ならねば此事はしらず。あはでは戀しう。見ざらんはいかにと。文にもいひかはすほどに。けふは其人もなくなりて。世は扨はかなきもの哉と。ことしはじめてしらる也。誠に此人よ。風雅は武門より出れば。かたき所にやはらみありて。先師もそれを

ゆるし給へりしが。我はやはらぎたる所にかたみあらんをと。逢時はたはぶれていひもしつ。まして蕉門の高弟にして。吾輩の先生なるをや。何にか此人をおしまざらん。我のみかくおしむにや。あやし。其歌ニ曰ク。

家は聖護院の森にかくれて。寒き梟の聲に驚き。名は落柿舎の梢に殘りて。空しき秋の色を恨む。

世ははたいかならん。我はたかくならん。

窓のあらしに燈をまもり。

軒のしづくに影をしたふ。

おしむべし。ア、かなしむべし。ア、

柿の木もあれ行猿のなみだには。夜こそねられね。人も歎らむ。嵐の山の山あらし。世にあらしとは山ぞしる。嵯峨野に人のさがなごゝろや。

○鄙歌

あふみぶり　よみ人しらず

「鴬に。きところはさぶいみなべらの。うらゝかことの。軒にけよやれ。

自得　はせを

「思ふと。ふたつのけたる其あとは。花のみやこも。ゐなかなりけり。

題しらず　おなじく

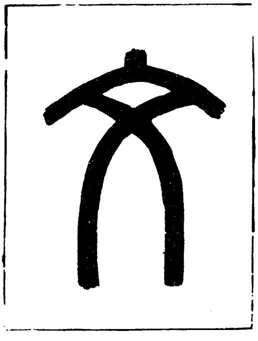
「あみ雑喉を。升にはかりて賣人は。かふ人よりも。あはれなりけり。

二かいより落てよめる　去來

「などてかく。いそがしいとて二階から。おちての後は。ひまになりけり。

やまひにふして　許六

「白かゆは。きらいなれどもやめはただ。いゐをばくはで。啜る也けり。



俳諧發願文　淡化
雲雀祭文　李由
剃髪文　支考
祭猫文　支考
弔古戰場文　芭蕉
斷絃文　許六

○文類

五老井　許六選

誹諧發願文　浪化

○人死して六道に生れ。からき目見むは。ひとへに娑婆の業因によれりけるとかや。世に立花すく人は。たて〳〵は崩し。くづして又たて。終日大汗ながし。葭の先に枇杷の葉つけて。馬の耳のおもひをなし。屈曲を好みて。鉄釘に打つけ。針がねにしはりかゞめて。見るめもくるしかるべし。わづか五寸の瓶に。千山万水のおもひをこめむも。猶〳〵氣づまりならんかし。若立花せむとならば。曾根の松を心に立て。ながしに清見寺の梅ならば。少は心ののびやかなる風情もあるべし。されど一時の榮花も盡て。まづ椿ころりと落て。無常をしめし。木槿一日の榮をさとりて。程なくしぼる。例の心短きにや。やがてぬき捨。果は烟と立のぼる。それさへあるを。棊うつ人は。赤日引つり。喰物時をわすれ。終夜同じ事ならべたらんは。飽ずやあらん。よき手あしき手とて。一座打こぞり。案じふくれ。棊石のかぎり蒔盡す時。何のをし氣もなく打崩したるは。さりとは残多き事なるべし。さしも手間入て案じたらんは。せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は。かならずさるの河原に生れて。父母戀しがる子共に立まじはり。地藏おぼさつの御衣の下にかくれ。あけくれ同じ事すらんも。又あはれなるべし。若一枝さして諸佛に奉り。一目投てはあみだぶ唱へたらん人は。うたがひなく西方に生れて。百味の外の飯食には。なら茶。蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結縁は。狂言綺語のふるみにおとし。百韻千句の數を合せて。一座の廻向は。あみだぶ〳〵と申て仕舞侍りける。

聖靈祭文　李由

○それ娑婆のありさまは。寸地に五穀を植ぬ所なく。寡婦が紡績の隙なる日なし。されど貧報に追ぬかれて。餓口更に閉る事かたし。いかなれば極樂淨土の臺を去り。百味の飯食をさし置。盂蘭盆になれば。取物とりあへず。瓜の馬の迎を待かね。麻骨の杖引づり。戸板あら莚の座敷つき。莧荒和布の賞翫殊に。きり麥冷素麵の腹中あひこそ。覺束なけれ。淨土のあまみに飽て。娑婆のかるみをよろこばれたる。聖靈もあるかし。地獄の釜の御戸ひらけたらんは。たまさかの仕合なるべし。食好みの振舞

までは、ちと奢の沙汰にもなるべし。ただ修羅畜生のあぶれ者。中有の浪人かはきとこそ。おもひやられ侍れ。常に願ひ置れたる作善功德。讀經念佛の行は。そも何になりたるぞや。佛果を得られたる歴々も。餓鬼あしらひにおもはれ。中にも新聖靈は。葛籠持の夫にさされて。外側に直るこそあはれなるべけれ。生前の列座のころは。あたま數よみて。瞎だてもせられたるに。灰の足跡に人數をしられ。終に送火の明に。はやし出されて。草葉の陰に歸りても。料理馳走の評判せんは。もとの人界より。願ひ損の後生なるべし。伏惟。中元の佳節。浮屠の教におほはれ。目連の母を始とし。西の海へ父を沈めしあはれまで。放逸の衆生。たま〱五倫親屬の名を呼出し。我も一たびは此馳走の數には入べし。一念の慈悲に。寺の小僧が腹ふくらかし。一包をよろこばしむるこそ有難けれ。あがり瞎は齒のあともなし。果は魚鳥のたすけとなりぬ。報恩經に。一とせの中六度。聖靈の來去の日ありて。上古は年の暮にも。此祭ありしを。いつの頃の簡略よりか。世間一統にいひ合せて。其沙汰もなくなりたるは。たゞつまる所は。坊主の迷惑とはなりにけり。聖靈連〱。今年は殊に穗づるもよし。地獄極樂の亡者連。才太郎畑のいき過まで。さそひ合せて御出あるべし。六日飛脚の頓死をききたて。一紙の祭文は御免を蒙らんと。仍謹如斯。

〽聖靈よ蓮にあまらば芋ばたけ

剃髮ノ文

支考

○浪花の舍羅。剃髮の前も舍羅といひ。ていはつの後も舍羅といふ。此舍羅を捨て。どの舍羅をか求めむ。舍羅〱として。更に舍羅なし。

〽一たびは瓢の花のあたまかな

祭猫文

小序　同

此文以四六之法用漢字韻也
是全似誹諧之漢和而不然
始以万葉手爾波文字用之
爲韻惟爲和文用韻之始
題太奇也

○李四が草庵に。ひとつの猫兒ありて。これをいつくしみ思ふ事。人の子をそだつるに殊ならず。ことし長月廿日ばかり。隣家の井にまどひ入て身まかりぬ。其墓を庵のほとりに作りて。釋自圓とぞ改名しける。彼をまつる事。人をまつるに殊ならぬは。此たび爪牙の罪をまぬがれて。變成男子の人果にいたらむとなり。其

文曰。

「秋の蟬の露に忘れては。鳥部山を四時に噪ぎ。秋の花の霜にほこるも。馬嵬が原の一夜に衰ふ。

きのふは錦茵に千金の娘たりしも。けふは墨染の一重の尼となれり。

されば

柏木衛門の夢。

虚堂和尙の詩。

戀にはまよふ。欄干に水ながれて。梅花の朧なる夜。貧にはぬすむ。障子に雨そゝひで。燈火の幽なる時。

鼠は可捕とつくりて。褒美は杜工部。蛙は無用といましめて。異見は白藏司。

昔は女三の宮の中。牡丹簾にかゞやきて。花まさにはやく。

今は李四が庵の邊。天蓼垣にあれて。實すでにおそし。

前生は誰が膝枕にちぎりてか。

さらに傾城の身仕舞。

後世はかならず音樂にあそばむ。

ともに菩薩の物數奇。

玉の林の鳥も啼らむ。

蓮の臺の花も降らし。

涅槃の鐘の聲冴て。閨爐裏の眠たちまちにおどろき。菩提の月の影晴て。卒都婆の心なにゝかうたがはむ。

如是畜生

南無阿彌

弔古戰場文

芭蕉

〇三代の榮耀。一睡の中にして。大門の跡は。一里こなたにあり。秀衡が跡は。田野になりて。金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば。北上川は南部よりながるゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて。高館の下にて大河に落入る。康衡等が舊跡は。衣が關を隔て。南部口をさしかため。えびすをふせぐと見えたり。扨も義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れては山河あり。城春にしては。草青みたりと。笠打鋪て。時うつるまで泪を落し侍りぬ。

〽夏草や兵どもがゆめのあと

返店文

路通

（流布本此一篇なし。今『本朝文選』によりて補ふ。）

〇旅店喰物をかしがむとて。鍋ひとつを求めたり。おほきさ一升あまり。其料にすへ置たるへつゐ。また一めぐりもちいさかるべし。火のあたる所わづかなれば。鍋の底みなひゞきれたり。手にふるゝ毎に。いとうあやうければ。煤おとす業もなむなかりけり。

「旅店一物二用の物あり。夏はすみ〳〵を釣て。蚊虻の觜をとをざけ。冬はよきころにたゝみて打かぶりぬれば。霜雪の愁。藁のふすまにかへたり。

「旅店はわづかの板庇なり。是は貧しき人ゝのすむ。長屋の端をしきりて。一間なる所にしつらひたれば。假のやどりに事かよひて。中〳〵おかしき住居なりけり。月の末には。家のあるじなりける人に少づゝのあたひをやる。もらひ求めて贈る時は。心を易し。贈ざるをりは。追出されむ事を思ふ。其是非にある事三十日。日ゝ世にむかひ。人に隨ふ毎に。にくまれむ事を悲しみ。譽られむ事をよろこぶ。油皿をこほさゞるがごく。氷の橋をつとふばかりになむ侍りける。

「おの〳〵三ッの物。求ざりしむかし。髪すり足をかろくして。容も潤ひ。心もさかむなりしかば。十とせ餘り。こゝろざしの至るに任せて。乞丐のまねをしあるきけり。しかありしも。其境にいらざればにや。あるは風雅に魂うごき。あるは人情にすがた轉ぜられて。いまだ止ぬる道をしらず。折から深川の翁。行脚のつてに。かり初の縁を結び。その樣もゆかしかりければ。過し頃の春。江戸の府まで尋ね來れり。六十余州あまねく人擧り氣のあつまる所なれば。ゆゝしき事の數〳〵にして悲しき品をかくせり。まづはとて。翁を訪ひまいらせければ。古郷の方に斗藪し給ふと。あたりの人〳〵こたえ侍りぬ。むなしき跡は草ふかき庵を閉て。はせを一もとを殘せり。藪梅のにほひ簾にちり。小鳥の聲軒にあそぶ。頼み來し心より。悲しみを求めて。しばしのあはれさいはむ方なし。情あるものありて。なつかしがりつゝ。我を伴ひ。おもひがけぬ此すまゐのあるじとなせりける。それかれはちなみやすく。友とする人ひとりふたりまうけ侍れば。あなたこなたに思ひそみて。一とせあまり。ふたとせの春までとゞまりけり。翁も頃日歸庵なりしかば。かぎりある命に。求がたき願ひみちて。侘るにつのり。詠ずるに高し。晝は杖を攀。斧を曳て。志を雲雨の外にあそばしめ。夜はともしびをとり机にそひて。おほくは千古の餘を論ず。かならず世をいろひ。人を謗るとはなけれど。目なれ聞馴し。上ざま下ざまの品など。物ずきにいひのゝしるは。暫時の情をむすぶなるべし。かくてなむ。此春も春めきぬれば。霞の朦ゝたるは。目をくつろげ。梅のかうばしきは。鼻をうごかし。雲雀のちり〳〵と囀るは。我に流浪の思ひをすゝむ。嗚呼。いづれの時。いづれの里。いづれの狂人か。同じく此むねをあはれまむ。つながれたる庵は

ぬしにかへし。彼鍋は人にうちくれて。身は笠ひとつのかげを頼みて。行衛なき方をぞたのしみけり。

〽肌のよき石にねむらん花のやま

断絃ノ文　　許六

○鳥の嚶々と啼き。木の丁々とひゞく。専友をもとむるかなしみの聲也。人はいふにたらず。子を捨妻をすてゝ。山林の友にまじはり。琴を斷。金を擲て。まことのこゝろざしを盡し。語りかたらふこそ。うき世のおもひ出とはいふべけれ。假初の旅ねに。一夜二夜の別をさへ。かなしと思ふならひなるに。あるは雲井の國に貶せられ。遠きあら磯に配せらるるわかれ。いたりてかなしかるべし。されど濁江に影見ざる歎きのみにて。同じ世にすむなぐさめもある也けり。たゞ長門ノ國に舟を出し。廣嶋の方に赴く人の別は。みるめなき海士の呼聲のいなせもきかず。磯馴松の獨さびしきに音信るゝ便もなし。こしかた行末おもひつゞけぬる悲しさは。遣方なからん。我に方外の友あり。江東平田邑。光明遍照寺。十四世の僧。亮隅上人。字ハ李由。一の字は。買年。四梅廬と號す。嘗て律師に任ず。姓は豫州河野の嫡流にして。安藝の宍戸を兼合せたり。母なむ。やむ事なき深窓の女にして。藤原なりけり。僧三代。我三代。あるは茶に交りてさびを好み。又は碁に暮して勝負をよろこばず。我レ僧は風雅に交る事二十余年。僧は寺を忘れ。我は家に歸る事をしらず。ひとつ蚊帳にむれ入り。同じ衾に足をつゝむ。若孔孟の理屈人を親にもたば。生たる甲斐はあるまじといへば。老佛のいき過たるを。子にしたらん時。身代破滅は立所なるべしとて。是より天地をそしり初て。牡丹芍藥はひくき花也。櫻海棠は能過たり。かれは愚痴。それは鈍なりとて。果は食好の上に落て。餅蕎麦切は急用にたゝず。終にはやみの豆腐に流れて、夜中の勝手をおびやかし。面目もなく其夜も明たり。月見。雪見。星祭。玉まつり。四梅廬の明ぼのには。鳥の初音を待侘び。七種の踏草には。蕗の臺を捜す。筍の藪を覗き。瓜なすびの畠をあらす。風臺にふかれ。水臺に冷し。爐開きの次手には。歳旦の句を鍛ふ。煤掃の逃所。鰒汁の定舞臺。從者が無返事に空耳をつぶし。小僧が白眼もわきむいて通る。遲々たる春の日みじかければ。長々たる秋の夜長からず。伊勢住吉の物まふでの頃も共に奉幣をさゝげ。吉野龍田の旅ねの夜も。同じ花紅葉に臥たり。三日對せざる時は。

百日のおもひをなし。五日音信ざれば。三年の月日を隔つるがごとし。然るにことし寶永第二。乙酉の六月廿二日の夜。例の積氣胸膈にさしつめ。たれかれよべとばかりにて。終に息絶ぬ。親族朋友のしたしきかぎり。末寺諸檀の僧俗男女。足を空にまどひ。國中さはぎかなしみ。四日五日はとりつゝみ物しけれど。壁生草の。いつまでかはとて。終に夏野ゝ原に送り捨て。平田山に立のぼる一すじの烟に。遠近の里人もいまはと思ひやるべし。後の事共は。有難きかぎりとり盡し。法中の高僧。日夜に席をかさね。和泉なるはらからの御坊も。朝夕のまとをつとむ。中陰の日數も程なくすぐれば。つどひあつまれる人〳〵も。おのがかたざまにわかれさりぬ。反魂の香も。招魂の祓も。共に手ぶるき處を奸まざれば。ふたゝび俤を見る人もなし。無碍堂の垂布の色も。鴈來紅に時を奪はれ。五老井のまつ宵も。一人の席を欠たり。つら〳〵四とせ五とせ。僧は肝腎に積をうれへ。我は肺肝に疝をやむ。平生病がちに打なやみて。朝々の露に世をはかなみ。夕の鐘に命をかぞふ。僧と我といへる事あり。我死ば。僧口を閉む。僧身まからば。我絃をたゝむ。思ふに蕉門のはいかいも。日々に衰へ。正風の血脉も。次第に絕て。きく人もなければ。する人も猶なし。孔子の道は。春秋にとゞまり。五老子がはいかいは。此文選に盡て。これより後。はいかい聞の博士とはなる也。僧すでに身まかりぬれば。我果して絃を斷ぬ。

傳

東順傳　晋子
公平傳　汶村
靈[illegible]傳　去来
直指傳　許六
牧童傳　支考
五井四郎傳　支考
和氣傳　李由

風俗文選 巻之八　五老井　許六選

○傳類

東順ノ傳

芭蕉

○老人東順は。榎氏にして。其祖父江州堅田の農士。竹氏と稱す。榎氏といふものは。晋子が母方によるものならし。ことし七十歳ふたとせの秋の月を。やめる枕の上に詠めて。花鳥の情露を悲しめる思ひ。かぎりの床のほとりまで。神みだれず。終に更科の句をかたみとして。大乘妙典の臺に隱る。若かりし時。醫を學むで。恒の產とし。本多何某の公より。俸錢を得て。釜魚甑塵の愁すくなし。されども世路をいとひて。名聞の衣をやぶり。杖を拆て業を捨。既に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて。樂む處筆をはなさず。机をさらぬ事十とせあまり。其筆のすさみ。車にこぼるゝがごし。湖上に生れて。東野に終りをとる。是かならず大隱朝市の人なるべし。

〽入月のあとは机の四隅かな

牧童ガ傳

支考

○牧童は。もと小松の素生にして。賀の金城に居る事年ひさし。家は硎刀の業をもて。よのつねのたつきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして。北枝は是が弟也。本より謝公が才能をあらそはざれば。かつて阮家の富貴をもうらやまず。たゞ同胞のあはれみ。をのづから世の人の鏡ともいふ也けり。むかしは梅翁の風流をしたひ。中頃は芭蕉の門に入て。時の風雅にあそべる心の。ふたりともにあそぶ所おなじからず。たとへば一巢におひたちぬる鳥の。彼は梅の花の清きに囀り。是は卯の花の曇れるにあそぶ。あそぶ處の同じからずといふは。たのしむ心の殊なればならじ。砥取の山の時鳥も。けふはとぎそと啼わたれば。夜を梟のあそび數奇となりて。吟席交會此人をしらずといふ人なし。時に居眠りをもて。生涯の得物とせり。ある時は欄干の花にそむき。ある時は檐外の鳥を聞ながら。眠り來りねぶり去て。四十年の春秋も過行ぬれば。貴介もこれをわすれ。高明も是をゆるし給へば。終に兜卒の內院にも。高くねぶらんとぞたかぶりける。湖南翁。かつてある法師に向ひて。牧童はよき者なりと申されしよし。よくてあしからんや。あしくてよからんや。其翁ならずはしらじかし。

しからば生天は先なるべくとも。成佛は後ならんといへる。むかしの人の心も。人はふたりの人に似てや侍らん。牧童常にいへりけり。我むかし。芭蕉の翁にま見えて。武の素子堂が。浮葉卷葉。此蓮風情過たらんといふ句の。物語に及ぶ。此句は此蓮と聲にとなへたるがよしと。おしへ給へりし外は。別に何事もおぼえ侍らずと。時の人是を評して。げに人は人のならひありて。さらぬみなもともたどりたるやうに。およづけいふらん。かくたゞありの人は。世にたふとしと。されば世の中の老の坂越たらん。其人は飢寒の間におきて。風雅もやゝあやうからずといふべし。

東花坊賛して曰く。むかし人は。恒の産なければ。つねの心なしとて。つれ〲の法師だに。安部野のあたりに。花むしろ織て。都のつてには賣もせられしか。まして世にある此人ならば。砺刀のわざのみいときよげなり。かくするどなる物の中にも。かの居眠りのさむまじくは。物と我とわすれたりとやいふべき。物其我をや忘れけむ。我其物をやわすれ劒。ねぶるに時もなく。さむるに又時もなし。何がし和尚の。虎によりて居ねぶりたらん。世におこがましく見られがまし。ある上人は。目のさめたらん時。俳諧せよとも仰せられしか。扨はいかいは人の心にすまじきや。たゞ我心にすなりけり。然れども。人のおもしろがらずば。我もおもしろからず。此さかゐをしりてこそ。俳諧はすなりけれ。さりや。はいかいは人の心をやはらげて。花に啼鳥の。花ならずしてかうばしといへる。世のまじはりの媒とならば。彼鶺鴒のはらからも。などや一巣のよしみなからん。俳諧はたゞ戯也。はいかいにはあそぶべし。世にたはぶれ。世にあそぶ時は。草刈笛の世にわすれて。牧童の名もおしむまじけれ。所謂素子堂が一蓮のちぎりあらば。其時の翁の心にあそびて。今も一字の師の影をも。ふまざれとなり。

公平ガ傳

汶邨

○坂田ノ公平は。何の處の人といふ事をしらず。源ノ頼義朝臣に仕へて。公時が男。山姥が孫とはいひ傳ふ。年のほどは三十あまりにして。終に衰老の容なし。其生質正直正路にして。人の異見を聞ず。一生彼レが妻といふものゝ沙汰なし。其高名をいはゞ。夷が千嶋の末〲まで。しらざる人もなく。慥に見

たる者もなし。たゞ好む物には茶筅髪に鉄棒にて。其勇力のつよき事は。恰も木綿織物の名目にさへなりにける。かゝる兵も。すこし艶だちたる所のあるや。公平女とはいへ共。いまだ男子の號には蒙せず。治世榮花の程を見むと思はゞ。和泉大夫が芝居に走りて。寺上りのわらんべ。又はつよみを好む中小姓の。感に堪たる顔つきを見るべし。つら〳〵無常迅速の哀をしるや。いづくの隠元禪師にはだまされけむ。ごそとすりて。公平道心とはこゝをいふ。剛き物先ほろぶためし。死ぬべき場所をこしらへ。終に黄泉に旅立せて。地獄破りの沙汰まではありて。其後は便りをせず。彼公平が手柄のほど。上下万民をしなべて。かんぜぬものこそなかりけれ。

五郎四郎傳

文考

筑紫に五郎四郎といふものあり。其性は小麥の餅也。明暮これに馴たる人は。たゞ五郎四ともいふ也。此もの野畠の間に生じて。肌をろそかに色くろし。しかれども菓子屋の手にわたりて。百練千鍛すれば。あるひは饅頭の肌やはらかに。かすてらの味ありて。ほとんど骨を落さむとす。むかし志賀寺法師の。容こそ痩たれ。心は花の都人を戀そめて。玉の緒の歌はよみ給へり。まして其名も。三輪の山本に住て。葛城の神の。晝のかたちにもはづる事なし。されば心くだり。姿いやしきだに。色はすつまじき世なりけり。五郎四何にか侘しからんよ。あるつらの人は。衣食の價をむさぼらず。酒肆婬坊の眼高しと。人の人にもてはやされて。こゝろの外に見ぐるしうやつれ。座上にありて。虱をひねる。さばかり捨はてたる世ならば。石上樹下のすまゐこそあるべけれ。しのぶ山の關路も。こゆる人のあればこそあれ。戀せじ。酒のまじとは。誰にかかためたるぞや。先師ノ曰ク。色をおもふ事。迂鈍のごとくせよと。汝をよろこぶもの。日夜に愛せず。汝をにくむもの。絶て嫌事なし。しからば物のほどをいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど。おほくは賤の女の杓子にかゝりて。ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて。身をかざらむとする人には。をのづからまさりもすべし。此さかゐは。汝ヂ五郎四がしる處にもあるまじ。何晏がおしろいせぬ顔も。一世の願ひにはあらず。兵部卿の宮の。かりのにほひもまた化なりとしるべし。世はたゞ世にしたがひて。眼前のたのしびをたのしむ

べき事なり。

ヘ夕がほに鏡見せばや五郎四郎

靈虫ノ傳　去來

○浮世に米といふ虫あり。母は出雲の國。稻田姫のながれとかや。父はゆく衛もしらぬ稻のとのゝ。夜な〳〵かよひ來りて。かくはいなほの孕み初けるとなむ。ふるさとに侍りし中は。川水にやしなはれ。案山子法師にもりそだてられ。やゝ生ひたちぬるまゝ。賤のふせ屋に籾とよばれ。晝はあら莚の上にならび。夜はせはしき俵の中に臥。されど久しく民間にとゞまらず。地頭代官のもとに上られ。或は鞍つぼに這のぼりて。須磨逢坂の關をこえ。あるひは船板に飛うつりて。敦賀下田の沖をはしる。終に商家の藏の中にかくれて。おそろしき空音を啼出しぬるは。あやしき里に。春の鳥の花にたはぶれ。秋の虫の露をかなしめるおもひにもあらず。時しらぬ虫の音ながら。春は一しほ音もまさりけり。又は旱うちつゞき。雨風さはがしき年の暮には。かならず高ねを出して。嫠婦の胸をおどらせ。窮士の腸を斷せるのみか。乞食などのこれになきころされむも。いとあはれふかゝるべし。常に國〳〵よりあつまりて。おほき時はねよはく。旁〳〵に分れて。すくなき時は音つよし。まとやみづからなかずして。人の口をかりて音をふるゝど。あだにあやしかりける虫のしわざなり。たゞ富貴の場にあそべる事をよろこびて。貧賤の竈に入事を耻。しかはあれど家〳〵にかひとられ。唐櫃の中の辛め見しより。ながく聲ねをとゞめて。いつとなく滅失けるにぞ。人〳〵は皆あきれ果侍られける。

疝氣ノ傳　李由

○疝は病の名にして。氣をつむ事山のごとしとは。素問の說なり。いづれの臟腑より出る事をしらず。陰經に城郭をかまへ。淫囊をかくれ里にさだむ。常は腰のあたりに逍遙して。火箱煖母の陽氣にうそぶく。かれが一世の手柄をかぞへば。花に啼。梅に囀る時。人のとがめをうけず。卯の花に千聲万聲を叫び。陰を感じては。秋の野もせの聲よりもしげく。時雨ふり初る頃。火燵にやりわたしては。きり〳〵すのよはりにひきかえ。高音をはりても。屁負比丘尼の働も見えず。公界に出て不圖とりはづしても。をのづから咎を疝氣に蒙らしめ。病氣不相應の大食も。かれが病の色に取なし。青ざめたる顔色も。ふく病やみと名付がたし。貴賤老若。男女

小兒のさかるもなく。又虚實のわかちもなし。大雪をしり。雨氣をさとり。土用八專には毎度蜂起して。胸膈に横たはり。痰を帶ては眩暈を起し。怔忡をしては胸をおどらす。世に醫術の良藥ありて。三和五積の煎湯を施し。あるは蕎麥切のおろしに驚き。芥子番椒に目を醒して。斗方を失ふ時か。飛脚の腨にかくれ。瀉腹の勢ひにさそはれて。不圖此界に下る時。矢場に杖のさきに巻出されて。果は六條河原にさらされて。尸の上の恥辱をかうむる。一陣やぶれては殘黨まつたからずして。終に太平を謡ひ。腹つゞみを鼓いて。天下戸ざしをわすれたり。

〽橙や疝氣治る御代の春　許六

直指ノ傳

○百年後の人に傳へて云ク。誹諧直指の傳あり。たとひ上手の名ありとも。理屈あるは。眞の直指の俳諧にはあらずと知べし。むかし守武宗鑑より以來。興をとる物をはいかいと名づけ。實ある事はかつてしらず。先師はじめて。躬恒貫之の魂を見ぬき。正風幽玄の實を得たり。道のべの木槿は馬に喰れたるより。あら野猿蓑に至つて。正風の躰を慥に顯はせり。俳諧中興の開山となつて。是より翁とは稱し侍りける。されば其風になびく門葉。里にみち。巷にみてり。されど理屈の境にまよひて。直指のはいかいは一人もなし。夫理屈を離るゝはやすし。理屈をはなれたる後は。趣向をはなれ。手に携る一物もなし。人麿のほのぼの。赤人の田子の浦の場所は。先師のはいかいにして。ふるくざひかへりたる事は。たゞ百人一首の歌を見るがごとし。無爲の妙句はいひながして盡す。跡に光明の光を放つ。理屈の句はつまりて跡へもどる。是彼ノ光明をあやまり覺て。終に理屈の境をしらず。和歌は貫之より。基俊。俊成に傳り。連歌は宗祇宗長とつゞく。今先師の俳諧血脉相承の者を聞ず。我東に赴き。始て師にまみゆる時。旅の句問れけるに。宇津の山にて。

〽十團子も小粒になりぬ秋の風　と申ければ。師驚ていへり。汝いづれの教によつて。愚老が流を見届たるやと問。我あら野猿簑を師とすと。吾子は誹諧の集を見る者なり。今わが膓は見ぬかれたりといふ。再會の日。嵐蘭子に語ッて云ク。我門人の器をもとめて。はいかいを殘さむと思ふに。昨日許子に會して我望を休せり。撰集に我魂をとゞむる時は。後代許子がごときも又あるべし。千歳の後も。愚老が血脉は朽ざる

事をしれり。其後三月盡の夜。師來りて。終宵閑談して。衣更の句を望めり。我一兩句いへどいまだ叶はず。師云。すべて世の人。句の慥を好む。上手はあやうき所に居れり。されば上手の上には。かならず仕損じおほし。愚老が當歳旦。

〽年〳〵や猿にきせたる猿の面は。まつたく仕損じの句也と。我問。師の上にも仕損じありや。答て云。毎句あり。仕損じたらんに何のくるしみかあらん。下手は仕損じを得せずと。我此時はじめて眼をひらきて。

〽人先に醫者の袷や衣更といへば。師云。是也。吾子が俳諧の底は此所にてぬけたり。はいかいに底ある者は。新古にわたりて自由を得ず。愚老は常に許子が行末を恐れて。みだりに句をいはず。諸門人油断すべからずといへり。當時もてはやす門人の俳諧は。全く先師の流にはあらず。晋子は作を好みて。己が一風を立たり。猶頃日の風躰は。はいかいの名を改め。餅とも酒とも名づけたらんに。何のたがひかあらん。東花坊は賢き者也。先師身まかりて後。みづから上手といはせ。師說にうとき事もあるにや。虛實新古の取ちがへも有べし。俳諧を弘むるには利ありて。はいかいの道を殘す爲には。おほきに害あり。他の俳諧の事はおいて論ぜず。其角支考は下手にてはなし。先師の口僻はよく眞似ける。芭蕉流にはあらず。はせを流正風躰の血脉を得たる者は我也。當時ははいかいに醉て甲乙をしらず。後世は忽醒て善惡を定むるに遠慮なし。其遠慮なき人に正風躰を示す。

三月盡

〽けふ限の春の行衛や帆かけ船

〽春なれや田の青苔に啼く蛙

〽四五月の卯波さ波やほとゝぎす

〽わが跡へ缺口立よる清水かな

〽欄干にのぼるや菊の影法師

〽看經の間を朝がほのさかり哉

〽初霜や鐘樓の道の沓の跡

〽はつ雪や治る江戸の人ごゝろ

是先師滅後の句也。先師生前の耳を驚せざるも無念にして。今又一人も。此句の腸を聞人なきこそ。猶又無念の事なれ。後人芭蕉翁の血脉。嗣人なしといふ事なかれ。今此傳を讀で。定て過當といはむ。謝して云。過當人も死し。又過當といふ人もほどなく死せむ。これその怒をやはらぐる處なれば。かならず見ゆるしをくべしと云々。

壺ノ碑　芭蕉
笠塚ノ碑　李由

○碑類

五老井　許六選

壺ノ碑

在奥州市川村多賀城

芭蕉

○つほの石文は。高さ六尺あまり。横三尺ばかりか。苔を穿て文字かすか也。四維國さかゐの數里（里數カ）をしるす。此城。神龜元年。按察使。鎭守府將軍。大野朝臣。東人之所里（置）也。天平寶字六年。參議東海東山節度使。同將軍惠美朝臣（原本朝ノ字ヲ脱セリ）獦。修造而。十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る歌枕。おほく語り傳ふといへども。山崩れ川落て。道あらたまり。石は埋れて土にかくれ。木は老て若木にかはれば。時移り代變じて。其跡たしかならぬ事のみを。こゝに至りて。疑ひなき千歳の記念。眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳。存命の悦び。羇旅の勞をわすれて。涙もおつる計になむ。

笠塚ノ碑

李由

○江東平田邑。光明遍照寺の地に。先師はせを翁の笠塚あり。十四世の佾某。蕉門に入て學をつむ事二十余年。恩は琵琶湖より深く。をしへは打出の眞砂より高し。朝々には香華を備へ。夕べには句を錬て。推敲を定めむ事を祈る。むかし芳野山にのぼりては。花の明ぼのを見せかけ。竹植る日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に。時雨霰のいかめしき音を。侘られたる俤もなつかしとて。死後に此笠を乞うけ。終に土中にこめて。門人各一句をさゝげて。か

の塚に同じく納む。世に報恩を殘したる。長崎に尾花塚。深川に發句塚。越中に翁塚。木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。されば西行の塚とて。國〳〵に殘したるも。此類(タグヒ)ならん。あなかしこ。死後の門人。師にま見えぬ事を。なげく事なかれ。はやく此塚に來り。季札(キサツ)が劔をかけて。一句をたてまつらば。生前の門葉にひとしかるべしと。弟子李由宇買年譜ッでこれを書ス。

辯

詩歌誹諧辯　丈艸　鷄先後辯　支考

豆腐辯　許六　天狗辯　木導

手足辯　李由　人参辯　許六

射御辯　莫

風俗文選　五

風俗文選巻之九　五老井　許六選

〇辯類

詩歌誹諧辯

文艸

〇一士あり。火燵壇上に誹庵を把て。諸生に示して曰ク。泰平聲震つて。風雅四海に波わく事久し。中にも俳道の一流。あらゆる國郷に入わたりて。村童野老も干麥を流し。鍬杖を朽さむとす。しかれども。詩歌の高みに涼居て。古人よばりする輩は。にが〳〵しく彈指していへり。渠がと。なんぞこゝろざしをやしなひ。道におもむくたよりならむや。ひとへに滑稽の雜口。虛言にして。俗中の俗なるもの也と。今我一辨を出して。銘〳〵の境をあらため。道〳〵のをし及べき所を判斷すべし。まづ和歌の徳たる事。誰かあふがざらん。上つ代より傳へ來て。人の心を種とする言葉。其誠より責らるれば。鬼もあら男も。頂をたるゝ正道なり。其樣躰。たとへば雲の上人の。衣冠つやゝかに。帶笏けだかうして。轅の中にいまそかるがごとし。青侍白丁はな〴〵しく。簪よそほひ。住吉玉津嶋と氣色うかび。あるひはよし野はつ瀬の遊山めきたり。たま〳〵には冨士。あさ間。須磨。明石の逆旅に。浦のとま屋の夕暮までは。ながめ盡しぬれど。さすがに蛸壺の底さし覗きて。あはれしるにたよりなく。小鰕まじりに。竈馬鳴蜑の屋には。腰かくべき褥も見えず。まして野くれ山くれのはし〴〵。牛道。鹿道。猿すべりの邊は。名を聞にも及ばず。これその位高く。官高きが故に。下に臨める風景。棄る物おほしといつつべし。詩ははなはだ無碍自在にして。志シのおもむく處。辭の隨ざるはなし。其飛行のすみやかなるありさま。かの名におふ。八匹の駿馬をまるめ合せて。飼にかふたるがごとし。手綱すれば。盤面にしゞまり。鞭すれば。四方八極。時の間なり。況ンやその上の風流。山を見て後むきに跨り。句を錬て手悶をなしぬ。鞍の上疊勝りにして。前後左右かけ障リなし。嗚呼快なる哉〳〵。如何せむ。今是に乘ルものの。おほくは桃尻なる事を。俳諧のかたちたるや。簑笠竹杖艸鞋しめつけて。朝立したるがごとし。京田舎去嫌ひせず。一所にあなまどひせず。雪の市中に抑れ。陽炎の芝原にこけたり。あるは山寺の小料理になぐさみ。士亭に逗留をあかれたるも。一段の笑ひなるをや。月

ほとゝぎすの曉を。木の根。岩ばなに寐覺て。又見ぬ方に歩をすゝむ。はてかぎりなき津〻浦〻。薩摩潟。蝦夷が千嶋の門背戸までも。さらばいへ。殘す物あるかは。是吾道の廣みにして。我あそび所といふべし。氣のむく處。目のおよぶたけ。風せよや〳〵と。暮ておぼえず手をうちけれど。從者は例の茶に倦じて。火の氣を打消し。勝手は夜半の時雨じみけり。

定先後辯

支考

林紅法師。むかし浪化に具せられ侍りて。吾翁と物いひ。顏をもしれる(りカ)ける人なりしが。其頃は年いとわかくて。風雅もねぶたきころなるべし。此地に嵐青のおのこありて。其時の次手ならん。手水湯もまたなつかしき梅の花といふ句を。手水湯に竹椽あをし 梅の花と。翁の生前に筆を添られたれば。かれは林紅が下にたゝむ事を恥。是は嵐青が上にあらん事をあらそふ。其あらそひは。まことに君子なるや。東花坊これが判者たらんといふに。いとけぶたし。風雅に通じて。翁を見ざる嵐青は。見ぬ戀にあくがれ。翁を見て。風雅に通ぜざる林紅は。逢てあはざる戀なり。いづれも戀の部にはありながら。心とけぬほどはいかにかまさらむ。くらぶ山の嵐も吹あへず。あだし野の露もをきかはりて。八とせのむかし語ならば。我も其翁は戀しかりける。世に風雅の信あらば。其翁は湖南におはして。面白き人には見ゆべきとなり。されば風雅の心にあそべ。心の風雅をば求むまじき也。

〽逢坂も粟津も果は秋の草

豆腐ノ辯

許六

〇むかし晝とあけ。夜〻と暮たる時。豆腐といふ物一丁出て。名もなく。類もなく。甲もなく乙もなし。たゞうまきと斗おぼえたるこそありがたけれ。それより小路〳〵に出生して。世〳〵の聖賢に料理せられ。昔豆腐は。石部金吉とてすたり果て。今やうのおぼろめく物を。豆腐の聖とはいひはやらす。猶五倫五常の献立を作りて。是は仁也。それは義なりと。急用に取出す。七つ入レ子の三つめ五つめを。求に應ずるには似たり。田樂一串にも。仁義は自然にありて。天地をつらぬく風味はもてり。折ふし藪賢人あつて。豆腐をあへ物にせむといへば。朱子程子の塩から口は。これを異端寂滅と配すれども。元來聰明睿智の飛助ならでは。此行過はならず。たとへば用名ノ介が(非二揚名ノ介一 口傳云)隣家にあたつて。碓を穿てり。終日耳

中に客たり。過去の聲は盡て。未來の音はひゞかず。たゞ一聲の碓にして。終日一聲のからうす也。許由むかし。堯の天下をうけず。なりひさごもかしがましとて捨たり。天下國家のたくはへは。輕して棄るにやすく。耳中の瓢の畜は。重うして捨るに難し。巣父が牛をあらはざるは。元來許由が耳の汚れたるを。にくむなるべし。和漢同じ耳垢等が。ほめしるしたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみづからしらば。すたりたる田舍豆腐も。開闢一丁の豆腐に。異なる事は。なかるまじかし。

天狗ノ辯

木導

〇萬の形ある物。いづれか畫圖にうつされぬ物はあらじ。されど眞向の天狗ばかりはなるまじとて。繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや。天狗しりの古法眼も。正面の鼻にはこまりぬらん。此もの。神祇釋教にもあらず。人倫生類の部をのがれて。俳諧の爲には。よき道具ならむ。世の人の我慢長ずれば。鼻にあらはれ。天狗となりて。杉の木ずゑに居を卜。愛宕高雄の山住を好み。都の秋のなつかしとや。うき世の嵯峨のあたり近き。嵐の山の夜あらしに。木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峯かつらぎや。高間の山の花ざかり。富士の高根にねぶりては。月雪のふる里をわすれたる。浮世のさまぞあはれなる。されど名歌などよむべき顏にもあらず。かの里も出かはりやありけむ。虚氣たる男をたぶらかし。嫁取もせぬ宿に。礫を打かけ。火事をすかれたるこそうるさけれ。かゝる境界にも。何の奢かありて。無盡の沙汰には及び。天狗賴母子と人にはいはれ。弦めその一座につらなり。六波羅の酒盛には。醉狂ひの舉句もいぶかし。うるさき顏にても。花の都人を戀そめ。牛若殿に浮名をながし。心中のしるしにや。爪をはなし。果は竹生嶋に送られて。たから物の數には入ぬ。ある人。洛の大儒に天狗を問。これ深山幽谷のいきれより。かゝる變異は生ずる也。何の怪とするにたらんと。されば天狗を山谷のいきれといはゞ。麟鳳は聖人のいきれならん。尾長虫は糞土のいきれにして。虱は乞食のいきれなる事慥なるべし。

手足ノ辯

次村

〇甲冑のよろひかぶとをあやまり。行燈挑灯をとりちがへたるは。むかしより國中みな誤りおぼえければ。却てあらためたる人を。あやまりといふも理ならん。こゝに一身の中。足をいやしとし。

手を貴しと定め置たるは。いづれか賤とし。いづれかたふとしとせむや。いやしとて。終に斬捨たる人もきかざれば。持にこそ定め置たけれ。それ足は行歩を産として。外の用をしらず。沓木履をかけ。草履わらぢをはきて。直に土をふまず。居る時は。足袋韈につゝみまはし。あゆみつかるれば。馬駕籠に扶乘られ。千山万水の間に坐して。風情に嘯く。手は一身の奴にして。定めたる産なし。頭の虱を捫り。跟のあかぎれを撫る。至らざる所なく。又なさずといふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍に。侍女小姓のつとめあれど。厠の役ある事を聞ず。されば我脚にて。他の鼻端の塵を拂はゞ。人怒つて。我を罪せむ。人また我が頭の蝿を。足にて追はゞ。我是をたふとしとおもへど。世の人我に代つて。にくみのゝしり。怒をうつして。我を阿方と號するこそ。おほきなる僣上なれ。其僣上人。蒲團簟に臥て。休する時も。かならず足を伸すを一番とす。湯に入人も。足からならでは這入がたし。向後足にあたらしみをつけて。手を古風のふるみにおとさむ。但し德利子は。各別の沙汰なるべし。

人參ノ辯

許六

○夫人參は。元氣大補の聖藥也。からやまと。これを寶とす。とりわき三十年來の和醫。人參なくて。人を療する事かたしと見えたり。邪氣濕熱陰虚火動のわかちもなく。人參〳〵には。病家おほきに草臥たり。凡人參の斤兩はかぎりあり。かぎりなき人參つかひに買とられて。世界の人參。威をまし。時を得たり。價高直にして。凡夫貧僧の口に入事かたし。産は朝鮮を最上とす。其代物。たちどころに魂を失ふ。醫家朝鮮の産を好るゝは。おもきがうへの小夜衣。質に置より外はなし。彼ノ人參醫者を察し見るに。理屈人の利錢する心になぞらへ。又は低人の價高直物にめでゝ。ひたすらたふとまるゝと見えたり。人參の力にて。あまねく人の命をたすかるならば。邊塞醫療なき地は。人種は盡べし。たとへ死ぬるにもせよ。人參に殺さるゝ者なし。人參ある國は。人參にて人を助け。又人參にて人を殺す。生死の算用は。持にして置べし。されど大切の金銀。ついへぬ方勝ならん。やまひに三ッあり。人參にてたすかる病。人參にて死ぬる病。人參なくて活るやまひ。此三ッの内。人參なくて事欠ぬ方。ふたつなれば。是もひとつの勝なるべし。我沉痾老衰して。

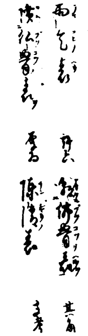
折ふし人參を用ゆ。唐の產。朝鮮の產。其功すこしもかはる事なし。醫家は人にあたへて。外より察し。病者は我呑て功を知る。たま〳〵病家に入て脉をつまみ。そこ〳〵に尋ねちらし。病見どをしの顏つきにて。合點〳〵で歸らるゝなり。彼人參にもり殺され。忽あたりたる事をしらず。其功いまだとゞかずして。むなしくなりたるに極ぬれば。又人參のきゝたるをも。たしかには知り給ふまじと覺束なし。きくとあたるとの境目もわかれざるに。朝鮮唐の產の微細の能は。知り給ふまじと。猶〳〵おぼつかなし。我おもふ唐より渡す所の。數百方の醫書。皆唐人參にて組たる方也。若人參朝鮮にかぎらば。其國所を記すべし。唐人何の遠慮すべき。されば川芎窮弓のたぐひも多し。それ萊菔は。尾張の產を極上とす。されど大根のなき國所。なくて事の欠たる事を。きかざるがごとし。それ醫道。俳諧。よく相似たるべし。醫者やまひにむかひて方をつけ。作者前句題に望みて。趣向をよする所。其理屈をはなれ。つく。つかぬの危き境は上手名人の手限。同じ場所ならん。當時醫をまなび。歌道を習ぶ人を見るに。其稽古前後なり。まづ所作を盡しからして。なを其道に精からん時の。學文なるべし。これ古人上手の仕かたなり。さるを學文よりまなび入て。一切理屈にてすますゆへ。祭過ての皆掃除也。むかし丹溪。素問を見て。四十より醫に入る。古今の醫聖と稱す。すべて醫學は。狹き物ならん。道を盡し。理を究るは。素問一部の事也。其餘は。味噌塩の献立にして。以呂波寄の字盡を引よりもやすかるべし。今の上手めく人は。每度素問の語で堅め。本草の說をつばなかす。文盲の病家。平詞を信ぜずして。大きに漢字に驚きて。上手名醫に極む。當世のやまひは文盲にて。素問本草を聞しらずして。彼名人の御藥はかつてきかず。ある人犬の吠かゝるには。虎といふ字を。書て見すれば。忽にぐると習ひ置て。ある時人喰とびかゝりけるに。習の文字を書て見すれば。其手にくらひつかれけり。日本の犬は文盲にて。虎の字のよめぬがごとし。たゞ理屈より理屈にくひ入り。是は上を見てゐる句。これは下を見てゐる句なりと。小刀刻の小細工は。みな素人に耳ちかければ。終に理屈にすゝめ入て。理屈地獄に墮すなり。されば霍亂の賣藥は。はくらん病が買なりとは。名人の一言なり。百年の後。若理屈がすたらば。わが僭上のこと葉も。又眞となるべし。

射御ノ辭

許六

○比類なき勇武の木陰をたのみ。百年の高恩は。廣く天をいたゞき。三代の微祿は。徒に地をせばむ。是を食る腸は。忠義をのべて形となし。武道を錬て肉を作る。膚たゆまず。目まじろかず。能登殿の矢尻は。胸板におれこみ。彦四郎が切先は。腹の皮におさめかくす。老は齋藤が髭にちかより。年は諸葛が齡に隣る。嗚呼千行万行の涙をおとし。三思一言の辭を殘す。夫レ武士の武道だて珍しからずとて。商人のなすにもあらず。たゞ武士は。武士の眞似がよき也。されぱとて。武士の武士臭きは。鼻を覆ふ。おのれ〱が家職の。ふるき事をしらず。魚物野菜のたぐひも。ふるき物はかならず臭し。武士の武藝を好ムといふは。本意にあらず。其武士幸ィに武藝に好當れり。博奕遊興に曾てかはらず。武術力量をあてにおもふべからず。馬物具を賴むべからず。佐ゝ木四郎は。わが氏姓の祖なれど。生食賴みに宇治川の先をかけられたり。もし世に生食和墨なくば。先のならぬも不自由なるべし。搦手數万の油斷人。一騎も殘らず渡しぬれば。佐ゝ木が鎌倉の荒言も。すこしは是にて戻りけり。嘲笑ふに似侍れど。佐ゝ木。梶原になづまぬものは。おほきに褒たる言葉とは。かならず知べし。一とせ大坂表におゐて。穴澤といふ天下無双の長刀の名人も。折下外記にたばかられて。終に組討には討れたり。一生の骨折は。此時一度の用なるを。打わすれたる不覺仁の。穴澤をいふにはあらず。たゞ藝術を賴むべからず。むかしより。一番鑓をしたる人に。上手の號もなく。又下手の號もなし。かくいへばとて。武藝をなすなといふにはあらず。武藝の名稱は。太平の代の看板なり。武藝とて。我役にあらぬ事は。せぬがよし。しらぬといふて耻にならず。立身にしたがひ。役替にのぞみて。其時すみやかに當役は習ふべし。其癖當役は無沙汰にして。いらざる說經者の馬乘習ふたぐひならん。一藝すぐれたりとも。武の全きにはあらねど。一藝をも愛し給ふは。大將の役なり。我わかゝりし時。此道にふかくわけ入。春の花のむなしくちり。秋の月もおもしろからず。あけては食をわすれ。暮ては寐る事をしらず。されど弓は力よはくて矢束を引ず。玉打は目にやまひありて。細カにあたらず。此二いろの道は。口おしく欠たり。凡ッ手足にかぎりあれば。しりても持では益あるまじ。劒術は。母方の祖父にしたがひ。正法

念流の兵法を學び。すでに未來記の奥義を傳ふ。祖父より四代の門弟。二千余人の中。未來記を嗣もの纔二三子に過ず。これ劍術諸流の源也。鎗は横手物に利ありとて。父が術を繼。寶藏院の法印より。我〻に至りて五代なり。馬は悪馬新當流を學むで。かけひきの道は達者なり。此三のものは。一騎武者の手足にして。これをしらぬものは曾てなし。これに精からんとおもふに。太刀打はつよく首に斬つけ。鎗ははやく敵の胴腹を。突ぬくより外に道なし。馬は其品おほし。よく乘得たりとも。軍馬の上をしらぬ時は。おほきに欠たりとて。黄母衣の隨一。河合氏の祕術を尋ねて。常に數巻のおもむきを。ふところに納む。馬はわが足なり。いたはる道をしらでは。息合病馬に疎しとて。大閤秀吉公の愛臣。桑嶋左近は和の馬師公也。此術をたづねもとめて。百二十巻の祕方に渉る。馬の好悪をしらざれば。求る道に疎し。古今目利は一流にして。山上入道が傳也。世に馬を見るといふ人あれど。山上入道の名をだにしらず。まして深き習ひある事は猶しらず。往昔は此藝稱せられて。祿をいたゞくものおほし。今はしる人さへなくなりたり。これを段の目利とはいふなり。馬上の五物。鎗合。太刀打。早乘。早をりは。鞍鐙の善悪によれり。これをしりて求めざれば此事かなはず。大因幡三代より。代〻の手曲をしり。寸法。曲尺合。殘る所なくおぼえて。これらを常に肺肝の間にかくし。泰平の世の安居の樂となせり。汝ひとゝなり。筋骨つよく。力つきなば。おのが分限をしりて。常役を勵むべし。功成名遂て餘力あらば。天地陰陽の理を探り。仁義五常の道を學びもすべし。これを文武の侍とはいふなり。かならず文にながるゝ事なかれ。武士は武道を先にして。文は後にと心得べし。今吾が猶子十歳の時。遺誡のはじめに。此辯を書して。武の魂をいるゝものなり。



五老井　許六選

○表類

雨乞ノ表

許六

○皇天天に位し給ひてより以來。四海の民を愛し。農業おこたらず。蠶飼時をうしなふ事なし。あまねく御うつくしみの波は。八嶋の外までながれ。ひろき御めぐみの風は。いたらぬ里〳〵もなかりけり。しかるにことしの夏六月。おほひに旱して。雨一すじも降らず。千里草枯て赤地となり。百川水盡て川原となる。野老たふれふし。村翁餓つかる。牛羊唾かはき。犬馬舌こがれたり。白晝に星あらはれ。日月は赫〻としてあかし。龍神も岩穴に引こみ。鳴神の駒も膝を屈してたゝず。土器の大豆は。忽いれこがれて。水晶の艾は。たちどころに火となる。白髭の鳥居は出て。葦原の變を感じ。鹿飛岩あらはれては。勘者の勞を盡す。大堰桂の水いさかひには。鋤鍬の鉾先をあらそひ。鳥羽の田づらの古井を汲では。釣瓶のひまもなかりけり。されば國王もまとありて。政たゞしく。古代の風を興し。かりほの庵のあらはなるをあはれび。寒夜のあかつきには。御衣をぬがせ給ふ。百官忠義を盡し。郡主民を撫ては。かぎりある貢物をゆるされけるに。天何の怒かあつて。かゝるからき目見せ給ふぞ。神泉苑の祈さへしるしなくて。布留の社の名のみ空し。牛を洗ふては雨をいのり。蓑笠をかけては氏神をたのむ。天はやくあはれみをたれて。雨をほどこし給はゞ。御湯は大釜を盡し。相撲はあたらしき鼻褌をかゝげむ。猶ひなびたる

笠の躍もおかしく。装束出立は揃はずとも。借着ばかりはゆるされて。摸様は天道次第たるべし。庄屋肝煎謹でかくのごとし。臣悲歎の情にたえず。拝表して以て聞す。

嘲佛骨表　　其角

古文傳類准讀孟嘗君傳之例

○むかし韓退之。表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀て。退子をあざける。人死して骨となり。骨朽て土とかはる。佛骨何の王位をけがさむ。佛骨もし人を穢さば。禽獣の皮骨は。猶人をけがすべし。人は天地の靈にして。禽獣人に及ばず。夫束帯のかざりには象牙をたふとび。珍簟の舗物には。虎豹の皮にふす。鼈甲は笄につくり。尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸。牛角。鯨の髭のたぐひ。宮室を飾り。器物を造る。たゝき膾は。なめて口中を潤し。雉子の胴殻。蕪骨は。噛で直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし。禽獣をたふとしとするは。何の謂ぞや。若佛骨細工のたすけにもならずといはゞ。はやく疾鬼にあたへて。錢かねとせざる。假令拂底の鬼なりとも。虎の革の犢鼻褌は取べしと。かれが淺見を嘲つて。しかいふのみ。

〽しばらくは蝿を打けり韓退之

讀佛骨表　　厚爲

○佛骨は西域の人の骨なり。漢土を飛こえ。日本に來る。豆腐蒟蒻に足突給ふな。いらざる長逗留して。厨子にこめられ。外より鎖をおろしぬれば。大小用にからき目見給ふこそあはれなれ。はやく手作の紫雲に打のり帰去給へく。

〽から鮭の舎利にならぬこそ過分なれ

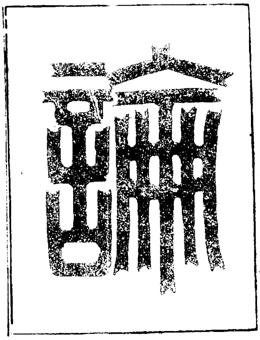
陳情表　　支考

美濃國山縣郡。在三輪明神社。清輔袋雙紙。記此神詠。東華坊。作文奉此神云云愚謂借用李令伯之表題號耳。

○世に天地ありて。天地は人の父母とこそいふなれ。人は万物の上にたてる物なり。その人に我あり。その我に東華坊ありて。西にあそぶ時は。西花坊ともいへり。東西の二華は。支考が坊號にして。野にある時は。野盤子といひ。家にある時は。獅子庵といふなるべし。さるは此御神の氏子にして。風雅はをのづから漂泊のたつきとぞな

れりける。むかしは桑門に袂を染で。ほのかに祖佛の影をしたひ。中頃は翰窓に灯をとつて。ふかく孔老の腸を見むとせしも。をのれが智をたのみ。物の理にたどりて。たゞ春の蜂の。窻にまどへるたとへにぞ侍りける。一とせ湖南の幻住庵に。白頭の翁を見て。才能は文字をはなれ。風雅は心を。あそばしむる物なりと聞て。此翁とあそぶ時は。酒にえへる人の。何ゆへならでも。たゞおもしろきこゝちにぞ侍りける。翁の曰ク。俳諧といふに。三ツの品あり。寂莫はその情をいへり。女色美肴にあそびて。麁食のさびをたのしみ。風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繍に居て。薦着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は。虚に居て實をおこなふべし。實に居て。虚にあそぶ事はかたし。此三ツの品は。ひくき人に。高き所をいふにはあらず。高き人の。ひくき所をいふなりとぞいへる。されば此さかるは。人のほめ。人のそしる所なるを。ほめられむとおもひ。そしられむとおぢふ。をのれがおもひにまどひぬるをと。理ははじめていたりぬ。事はつくすべからず。かくて俳諧は。まのあたりにありて。口まさにいはむとすれば。心のくまをつくさず。人のやすき所をまなばむとて。をのれはむづかしき奥をたどり。をのれむづかしからざらむとすれば。人は金玉の手づまをつくす。ふかゝらずしてあさく。あさからずしてふかし。朝におもひ。ゆふべにいねて。此心又やすからず。ある夜。曲翠亭にあそぶ事ありて。尾の荷兮が。蔦の葉の一句を評して。俳諧はかくいひつくすまじきをと申されしに。さはとむづかしき夢の。さめたる心地ぞせらる。落柿舎のぬし。洒落堂のあるじも。おなじ夜のあそびに侍りて。我はかくおほゆるをといへば。人はさもおもはずとこそ。あざむかるれ。よしや我心のせまりたらん時は。焼火の轉寐に。雪折レ竹をきゝ。戸の節穴に。稻妻を見ても。我はかくまどひたりと。おもひしらんに。我はわがやすき所をしれりけりと。今宵はじめてぞさだめける。是よりあづま路のかたに旅立て。松嶋象潟のながめにあき。越の白根のしらぬ行するも。心づくしのたびねをだに。生の松原の名によそひて。いけるかひありとぞ見はてぬる。今年は老の名によばれて。此古里の春をもむかふるなるべし。人の命のさだめがたきに。耕ずして食ひ。織ずして着る。我はた世の人に。何をかおふせたらん。入ッては此神の光にてらされ。出てはかの翁の徳にあそぶ。俳諧はおのづから。人の上にいはれて。我は

いかいの人をあやまてるなるべし。人の俳諧のあしからんをば。我俳諧のあしき也。我俳諧のよからぬをば。神の風雅のよからぬをといふべし。まして夜居りの神心には。朝寐も身につみておほすらんかし。此表をいさにくみ給ふな。疎〻はかうまで頼むまじき物を。たゞ俳諧に命をかふべくとも。幣の御まへにかしこまりて稽首の涙をかけ奉ける。



旅ノ論　許六
[illegible]論　許六
仁王[illegible]論　[illegible]

風俗文選巻之十　五老井　許六選

○**論類**

旅ノ論

許六

○陰陽にしたがふ蒼生は。これ皆天地の螂蛆也。鮨食に生ずる蛆は。生れながら粮に富。口あきて夜〻出る鳥は。觜にさはるをとりて。やう〳〵おのが糧とす。されば とて粮のとぼしきを歎き。俄に業をかへむ手段もなければ。木啄のつゝきまはり。蜘蛛の網を張て。待より外はなし。つら〳〵東西に奔走する旅客。粮の爲にせざる人稀なり。かの中に。風雅に旅する人に代て。論をくはふ時。こゝに大國を領じ。大軍を將て。往來する人は。粮を求る事おほひなれば。又その罪も甚深し。又賁引の錢をたくはへ。十二灯をあつめて。ぬけ參りする二歳

三藏。一錢の袖乞に満足して。五臟をやしなふ。かれと是とを論ぜば。二藏三八が上にたつ事かたし。一日の糧。一月の粮。一年のかて。一生の糧。もとめたくはふる計。其根ふかく。其源とをし。又馬士飛脚のやからも。旅に生涯を果す。圓位。風羅のたぐひも。旅に死なむとはかりて。心のまゝに終る。さればかたちの似て。志のたがふ所は。雲泥の論なり。我ことし衣更着のはじめより。五月の半までに。旅する事。すでに四百余里。おのが身ノ上を論じて見る時。大軍の將は。罪重しといへども。其利益大きにふかし。吾今日の一錢をも求めず。五斗の米を荷ふて。東西に漂泊する事。馬子籠かきの論に落て。終には並松の間に餓死せむ。さればとて。鮨めしの蛆を願ひ。糞虫の粮に飽けるを。うらやむにあらず。

仁不仁ノ論

北枝

○楯つくる人は仁にして。鏃するものは不仁なりとかや。醫をなす人は國を醫し。醫人の名目は仁にして。實は不仁なるべし。病者おほく療する人を。名醫とも。はやり醫者ともいふ也。其はやる所をよろこび。乘物ざしめかして隙なからむは。不仁の第一なるべし。さればとて。かの藪醫者のはやらざるも。仁とはいひがたからん。たま〳〵の病人とて。むかへたらんをうれしと。羽織打かけ。時得たり顔に。はしり出らるゝこそこれも不仁なるべけれ。むかしもろこしに。矛盾を一荷にしてうる人あり。矛うらん時は。いかなる楯もたまらずといひ。盾かふ人には。干將鏌鎁も。通る事あたはずといふ也。かたへの人ききて。其方が盾を。其方が矛にてとをさば。いかにやと問れて。終にものいはずして。本國に逃かへりぬ。これを矛盾とて。おかしきたとへにはいふ也けり。吾朝にはこれをやはらけて。慶庵とも。ゐしやぼんともいふ也。又は小村の道場坊も。藥をほどこす道は。仁者なれど。これもはやりをよろこばれて。縮緬醫者にかはる事なし。又は後生たすけむといふも仁の道にちかし。されど釋氏も死をよろこび。鈴打ならしてとぶらはるゝは。これも不仁の沙汰なるべし。むかしより此譬を。穢多の伯樂とはいふなりけり。

蕎麦ノ論

許六

○天は天ずき。地は地ずきにして。いづれの時。おもき命あり。又は誰人頼みあつらへ。陰陽五行を以て。万物化生する事をきかず。聖人天地の沙汰を

大きにほめたり。天地はほむれ共よろこびず。そしれどもいからず。これ皆聖賢の理屈にして。元來天地に分別はなし。天は升る事を好。地は降る事を好みて。四時の骨おり。晝夜の苦勞。人もやとはぬ借上こそ。大きなる損なれ。それより人物山川草木鳥獣まで。おのが一筋に好入て。外の物好は更になし。雨は雨好。風は風ずき。夏は暑ずき。冬は寒ずき。されば櫻に梅もさかず。鶯がほとゝぎすを鳴たるためしなし。聖人は聖人好。阿方はあほうずき。鬼は地獄ずき。佛は極樂ずき。人は人ずき。我は我ずきより外になし。世に儒釋道の好人出て。位の足のたてるが如し。世々の方人ありて。わが好たる道の外なしとおもへり。五戒五常は此方より出ると思へど。五倫五戒の墨曲尺をはづれて。人一日のたゝぬ上は。儒佛なくても事は欠まじ。儒佛崇敬の人。聖人佛より。飯一盃ふるまはれたる沙汰をきかず。たゞ士農工商の家業の外。さら〳〵別に大道なし。當時儒好を見るに。敬の一字は胸中にありて外より察しがたし。たゞ坊主を惡み。佛をそしり。親兄弟身まかる時。大きなる棺槨をこしらへ。檀那寺のやつかいとなす。是より外によき事は見えず。異朝の法に。地を買とりて葬るは。大國の風俗にして。ふかきわづらひなきと見えたり。和國廟の爲に。地を買とらば。神代より日本半國は買とられむ。砂糖曲物にて埒するこそ。佛家大きなる才覺なれ。いにしへより鳥邊船岡に葬あまりたる事をきかず。釋氏の事たる事。田畑もたで秋おさめ。蠶飼せずして冬あたゝかなり。人間一種の建立にして。もし此法なくは。此ともがら。いづれの嶋にかわたさむ。佛法には精進日あり。むかしは祥月一日の沙汰なり。それさへ大小のくり合。閏月の相違にて。命日の錐もみは覺束なきに。眷屬あまた出來て。飯料不足を補はむ爲。毎月にはなりたるとや。月〳〵齋米をやりながら。二親もたぬものなければ。一とせの中。二日はのけて。廿二日魚くはぬ日こそ口をしけれ。佛法修行の人を見るに。其なす業は坊主のまねなり。成就の時と見えて。くり〳〵と剃まはし。袈裟衣の仲間に入て。上品上生とおもへる時。其なり濟したる所を見れば。物も見事なる坊主なり。たま〳〵佛法をたのしみて。浮世をやすふおもはるゝ。人のなきこそ本意なけれ。儒佛の最初はあたらしからん。次第〳〵にふるくなりて。聖人佛も出給はず。是にはいかいを加へたらば。忽あた

らしき聖人も出。當流の佛も出生し給はむ。むかし堯の二女を許したるは。聟も舅も聖人の寄あひ。孟子嫂おぼるる時。さし合をくりはじめたるは。豈孟軻の流行にあらずや。佛は功徳をすけり。達磨の無功徳はいき過ながら。これ佛法のあたらしみならん。夫當時凡家の人。聖人佛になりて何の益かあらん。たゞ一家の中の聖人にて。世のたすけにはなりがたし。其上仕官は浪人のもとひ。工商農業の人は。金銀田畑をかすめとられ。道しりだけの損をして。たちまち非人乞食なり。その時例のふるみにおとし。時にあはぬとて仕舞けり。とてもなりにくき。聖人佛をうらやまむよりは。たゞ愚痴に金銀をたくはへ。世の爲。人の爲。ほどこし侍らば。生聖人生佛とて。釋迦孔子より有難がらん。たとへば遙飩を好人あり。其子は蕎麦切を好めり。蕎ずきはうどんを謗り。遙飩方はそばきりをにくめり。日夜朝暮此論やまず。むかしより。蕎とも麦とも。世の一統せざれば。蕎はそば好。麦は麦ずき。天は天ずき。地は地好には極れり。そしりてをかしければ謗り。ほめてあたらしき時褒るものは。我大道のはいかいなり。

俳諧頌　李由
蕎麦切頌
石如頌

○頌類

五老井　許六選

俳諧頌

李由

○はいかいもと和歌の一躰にして。神代よりはじまり。更に連歌より出たるにあらず。其法式。連歌に相似たれど。あながち無言。新式になづむ事なかれ。俳諧。誹諧。誹諧。滑稽。諧謔。謎字。空戯。鄙諺。狂言。九つの品にわけられ侍る。いかなるをいふにかあらん。まさしくしる人なし。公任

經信ときの人もしらざる事なれば。末代にさだむべきにあらずとは。御抄のをもむきなり。古今。千載。後拾遺等に見え侍れど。今のはいかいも。九つの中には。相かなへるならん。これ和國末代の風俗にして。四海こと〴〵くながれわたり。あまねきもてあそび物とはなりにけり。石筆の早態に。花月のおもしろみを記し。火燵にずりこみ。障子の穴に。雪霙を吟じては。余所の寒さを侘たり。獨居無言の行に倦ず。旅店山野の道づれを求めず。豪貴にともなひ。鄙賤にまじはり。夜明しの會に。親の心をやすめ。年に似合ぬあだ口も。俳諧師にゆるされ。野老村童も。睦月五月のひまを伺ひ。馬士船頭も。山川万里の勞をなぐさむ。夫レ俳は。市中にあつて。山林のさびしきをうらやむものなり。全く山居の道具にあらず。目に見えぬ鬼を泣しめ。勇武の心をやはらぐるものは。詩歌連俳ともに。其感ひとしかるべし。かの中にも。一言の活法に。白髪を若やかし。忽チ千歳の命を延るは。ひとり俳諧の徳也。鄙言俗風とて。君子いやしめ給ふ。連歌は徳高うして。やむごなき御もてあそびよりはじまり。宗祇一代は百韻に花三本なりしが。宗長の時。ふかくかなしみ。花四本。雨二つの勅許を蒙る。鰒は毒ありとて。喰ふ人の稀なるに。陰徳をかくし。俳諧俗流とて。捨られたるに。おほきなる手柄ありて。日〳〵の流行に。新風をおこす。これ其徳のすぐれたる第一なるべし。

蕎麦切ノ頌

雲鈴

○蕎麦切といつぱ。もと信濃ノ國。本山宿より出て。あまねく國〳〵にもてはやされける。されば宇治の茶あつて。同じく茶臼石に名高く。伊吹蕎麦。天下にかくれなければ。からみ大根。又此山を極上とさだむ。洒〻落〻の風流物。誰レか是を崇敬せぬものはあらじ。世に道成寺の能あれば。其次ャは三輪にきはまり。鶴の料理過て。後段の時は。かならず蕎麦切の場所なるべし。常に胃の氣をめぐらし。諸欝を散じ。壽命を延る聖藥なるに。いづれの虚氣人か。中風の毒とあだ名をたてられ。蕎麦喰ぬ人も。頓死中風はするなるべし。たゞ蕎麦一人の罪となるこそ口をしけれ。近頃は慳貪屋の手に落て。所化寮の俄客に。青貝の手桶荷ひこみ。比丘尼宿の大よせに。錫の鉢をすえならぶ。壁に紋書たる大濱茶屋には。一本鎗の旅客をとゞめ。寐覺の門前の何ン本もりには。通りの馬士を招く。

有馬の夜食。淀の川舟の乗合。眞那精進のわかちもなく。をとこ女の去嫌ひもなし。夫蕎麥大根は。君臣佐使の付合なるを。越路の國に。胡椒の粉の折形を備へ。都の方には。山葵薑にてやらるゝこそ本意なけれ。先師翁のいへる事あり。蕎麥切誹諧は。都の土地に應ぜずとて。一生請合申されずとかや。花車を好みたるあるへいとう盛もくるしく。又は一箸づゝの盛並べも。中〱待遠なれば。たゞつくね盛の大椀にて。三盃目の時。はじめて本性には立もどりけり。仕舞限の二番がさねは。無念無想の境界になつて。うき世のおもひ出を申けり。

酒徳ノ頌

朱廸

○伯倫酒徳の頌作る。其徳あげてかぞへがたし。さる徳ありて。内損脾虚の病を愁へ。酒毒悪腫の痛を生じ。身をやぶり。徳を失ひ。なま酔の號をとりて。朋友のまじはりを斷。破戒の過を蒙りては。佛の道にそむく。されば盜跖にも徳ありて。伯夷にも損あり。これ其用る人によりて。其理のとりあやまりなるべし。我今酒の徳を見るに。京奈良の酒店。伊丹鴻の池の酒藏。日〻に身を潤し。月〻に屋を潤す。綾羅錦繍に目を見出し。五味八珍に腹をこやす。ある時は吉原嶋原の揚屋にあそび。大臣とあふがれ。作善供養の場につらなりては。大檀那の號をとる。是みな酒袋のしぼり粕なるべし。きのふまでは下部の藤次といへるものも。けふは何がし町の名主。宿老の列につらなり。小賓請酒の細望姓も。白壁をならべ。大釜の煙絶る時なし。これ世に上戸といふものありて。酒の徳は顯れたり。さあらば下戸はあまねく冨るものにやといへど。むかしより下戸のたてたる藏もなしとは。皆飲ぬけの金銀にて。三ッ葉四ッ葉の酒藏とはなれるなり。是も又理のとりあやまりなるべし。其徳孤ならむや〱。

石臼ノ頌

芭蕉

○市中にあつて。俗塵によごれぬものは。けにそのはじめをよくするよりも。その終りをとぐるとはかたし。商山竹林の猛士も。猶出てつかへ。寛平華山の上皇も。終りたしかならず。たま〱これを見るに。たゞ石臼のひとつのみ。聖一國師は。これをもて肉身をやしなひ。法身をしる。民家にはまた。麥刈そむるころよりも。籾こきおとす冬にいたるまで。片時も余所にする事なし。其高き事を論ずれば。役優婆塞の庵の中にかくれて。彼たぐひを道引きり（小文

庫』に「功」とす。従ふべきか。)の上に立べし。上と下とふたつなるは。ちからたらざる者の爲にもつぱらなればなり。不斷士間にあつて。莛より外を見ぬは。誰に居る事のとゝのへるにあらずや。かりにも黄姉の手にとられざるとの。ありがたき事を。ふかくさぐりしるべし。目なだらかなる持は。かますを擔ふ老翁の出來て。こつ〳〵とする音すみて後は。季札が劍を。塚にかくるとをはづべし。名をぬすむ盗人はあれど。石臼をぬすむ盗人はなし。また人の心をみださゞるのいたりならずや。月さしのぼる夕顔の陰に。ひとりはをどろの髪をまくね。ひとりは佛のまねをするあたまなりにて。くるしき事をおぼえず。挽まはすちからに。其飢をたすくるは。文王の始につかへたまへるに事たがはず。やゝいま様の。むづかしき歌のふしにもかまはず。聲も唱歌も古代のまゝにして。枝もさかゆる葉もしげると。しはぶきがちに。わなゝかれたるぞをかしきや。

(越人の『不猫蛇』によれば、此文章は越人の作なるが如し。)

讃

西行上人像讃　芭蕉

神農像讃　涼菟

團扇賛　荊口

入學賛　許六

紫芝園賛　許六

○讃贊類

五老井

許六選

西行上人ノ像讃

芭蕉

○すてはてゝ。身はなきものと。おもへども。雪のふる日は。さぶくこそあれ。花のふる日はうかれこそすれ。

神農ノ像讃

凉菟

○野にもね。山にも寐る人を。人は神とも。佛とも思へど。薦着たる乞食は。門にもたゝせず。この皇いかなれば。十善の位におはして。手づかみに物はきこしめすらむ。さはいへ。春の野あそびには。酢味噌あらばといひおきけむ。慮外ながらもわれらが活計なり。

ヘ神農もおもへば苣に野蒜かな

團扇ノ贊

荊口

○詩あり。歌あり。はいかいあり。おほくは班女が似せ箔つかひ。これこそ古手の打ぬきなれ。中にも山崎にすめるさる法師が。

ヘ月に柄をさしたらばよき團扇かな

とは。いふたりけりにて詮はなし。上弦下弦は。月の部に入レぬ合點も迷惑なり。今當流のちか道は。其その傍の炙餅。いかなる人も一串は。塩梅よしに贊して曰ク。

ヘ味噌つけてあぶらればよき團扇かな

入學ノ贊

許六

○儒家何がしが猶子。洛に入ッて道をまなぶ。贊していはく。もろこしに橡樟七年の才といふは。鈍にして遲し。當時は三年にして。大木の幅する木あり。油斷すべからず。

ヘ本箱にまづなる桐の若芽哉

紫芝岡ノ贊

許六

五老井四絶之一絶也

○靈芝の産たる事。王者仁慈ある時は。かならず生ずと。泰平長久の時をしりける。いとめでたし。されど聖代に。あはじ〳〵と待けん長さよ。さる心ながさにては。不圖うちわすれたる代もありけむかし。又地靈なれば生ずともいへり。ある書にいはく。東坡夢に人家にあそぶ。堂西に小園あり。古井の石上に石芝あり。上に紫藤を生ず。折て喰ふ。味ひ鷄蘇のごし。予が五老井の上に。艸宇藤あり。其西に紫芝岡あり。されば坡翁が夢は。余が五老の地なる事

明なり。戯れに賛して云。

靈芝よ　靈芝よ
田夫の孫の手となる事なかれ
禪僧の如意となる事なかれ

我きく。いにしへの韓氏は。楚にあつては。わづか執戟郎にいやしといへども。漢につかへては。元帥にのほつて。終に大漢を興す。器物も又同じ。我朝とゝやといふ。名物の茶碗は。魚店何がしが猫の飯器たるを。達人とつて万貫の道具となせり。これ用ひらるゝと。用ひられざるとなり。あなかしこく。證文の出しおくれ。出損になる事なかれ。

○書類

五老井　許六選

院艶書　　日蓮上人報書

院ノ艶書

○やまとの國に梟といふ鳥あり。鵂姫をこひて。文かきやるごとにそもじはまともじ。いくたびも文かよはして。まとの文字の返し見るまで。

日蓮上人ノ報書

○新麦壹斗。たかむな三本。油のやうな酒五升。南無妙法蓮花經と回向いたし候。

以呂波文字後序

上古日本の文字ありて。今に用來るもの。兩三字あるべし。いつの頃よりか。漢字わたりて。本朝の文字は。たえ果てしる人もなし。もと假名字といふは。萬葉書の事にして。訓と聲とを交へ用ゆ。これ以呂波文字のなき以前。男女尊卑。これをもて文字の用を達せり。源ノ順が。萬葉集のかな付も。聲と訓とのまぎらはしきが故なり。片かなは。吉備公の製作にして。アイウエヲの五音相通の文字とす。大和假名とは此事なり。又いろは文字は。世に弘法の作とのみおもへるも。一決しがたし。一説に

以呂波仁保へ土。知利奴留遠。

以上十二字護命の作。

和加與太禮曾。門爾奈良牟。宇爲乃於久也末。計不己衣天。安左幾由女美之惠比毛世寸。以上三十五字は弘法の作。

京の一字は傳教の作也。いろははもと四十七字なるを。傳教此一字を加て。邊鄙遠境の男女迄。王土の字をしらすべき心ざしにて。一二三より。千万億の數字は。聖徳太子のかぞへ歌を。こゝに添たりといふ。又は空海。勒操。傳教の三師。共に造んともいへり。又兼良の纂疏には。四十七字は天地自然の聲。彼漢聲を假て。和字となすとかや。さればいろはを國字といひて。天竺震旦になき字とはいひがたし。是まつたく漢字にして。草書のすがたなるをや。文の躰は。長歌短歌のさまにして。あまねく末世に。手習ふはじめにぞなれりける。さるを後代此中の字性。とりあやまり。書あやまる事おほし。まづへの字は。乀ノのへにして。ためずして斜なるべし。これ。へとえの分にて。たはみたるを。ちゞみえといふなり。とは土なり。止の字にあらず。すべていろはは訓をとらず。皆聲を用るによつて。土なる事明カなり。つの字に説ゝ多し。たゞ門の字と心得べし。但口傳。(円也)むは牟也。世に歩武とおもへるは。點をうつ所になづめり。またく歩武にあらず。點はムの押の點なり。おの字はおゐての字にして。木篇に作るは非也。又をの字は遠の字なり。これを口のを。奥のおといふ。ゑは衣の字にて。ちゞみえといふは。兄の字に歸す。これ橘諸兄の兄なり。上代のいろは文字と。中頃今樣の字なりは。はなはだちがへり。次第にあやまりもて行て。あらぬ物にな

り果たり。そのかみ。源氏物語出る頃にさへ。はやとりあやまれりとて。紫式部も。これを歎きたるを。當世野郎傾城の書ちらしたる字形には。正字の俤もなく。此後次第にしる人もなくなり果。いかばかりの字形にか。なり行むもはかりがたし。京極黄門定家卿の。かなづかひとて。定めおかれしより。歌道の傳授物にして。是をしらざるものは。無下の事なるべし。されど大和言葉に用る假名字には。まつたく字心なし。上古の万葉書にて知ルべし。これ天竺の陀羅尼字の類ならん。假名遣一通は。和國のものゝしるべき事にして。しゐて吾ガ俳諧の上にては。ふかく吟味せむもむづかしかるべし。たゞかな書のたぐひには。此以呂波の正字を。たゞしおほゆるを。第一とすべき事なり。文字のたゞしきもろこしにさへ。文字をとりあやまりて。古篆の篆書に。たがふものおほし。眞は眞なり。行は眞より出る。草は古篆より出て。まつたく行をやつすにあらず。草書に精しからんとおもはゞ。篆字にわたつて。其源をたゞしてしるべし。されば和朝のいろは文字も。此正字をもて。たしかに書ば。たとひ異朝にわたしたりとも。文字の正字はすみやかに。異國人もよみあかすべしと。九花亭の主人。汶氏汶村。風俗文選。かなづかひをたすけむが爲に。これを跋す。旹寶永三丙戌春三月ノ望。

右此本朝文選全部十卷者五老井許六先生之撰也嘗聞先師芭蕉翁雖レ有二此志一文章未レ調而止レ之先生十五年來繼二此志一終其功成雖レ然甚祕レ之深藏レ之門人等空歎レ朽二文庫一二三子合レ力而借二發書笈一爲二自他一直二其本書一與二書林井筒屋一彫二之梓一全無二一字誤一最無レ類本只恐二僣偷罪一可レ蒙二 和歌三神御罰一者乎

寶永三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

洛下二條下寺町　野田彌兵衛尉梓